

クロスロード

4



2019 APRIL

特集1

小学校教育分野の活動ポイント

特集2

“任期終盤”の心構え



現在の派遣国数

77 国



JICA海外協力隊 派遣現況

(2019年2月末現在)

■ アフリカ地域

国名	JV	SV
ウガンダ	45	2
エスワティニ	4	1
エチオピア	36	
ガーナ	58	3
ガボン	19	9
カメルーン	26	1
ケニア	45	8
ザンビア	82	15
ジブチ	11	
ジンバブエ	6	
スーダン	28	
セネガル	43	3
タンザニア	72	3
ナミビア	17	
ブルキナファソ	18	
ベナン	52	
ボツワナ	27	
マダガスカル	35	
マラウイ	65	
南アフリカ共和国	6	5
モザンビーク	41	3
ルワンダ	41	
レソト	1	1

■ アジア地域

国名	JV	SV
インド	12	
インドネシア	21	4
ウズベキスタン	24	5
カンボジア	37	10
キルギス	28	
スリランカ	45	1
タイ	33	5
タジキスタン		4
中華人民共和国	12	
ネパール	50	3
東ティモール	31	
フィリピン	29	3
ブータン	19	6
ベトナム	41	22
マレーシア	19	8
ミャンマー	9	4
モルディブ	11	
モンゴル	42	
ラオス	43	3

■ 大洋州地域

国名	JV	SV
キリバス	7	
サモア	26	1
ソロモン	35	6
トンガ	15	2
バヌアツ	20	5
パプアニューギニア	29	5
パラオ	9	5
フィジー	25	3
マーシャル	10	3
ミクロネシア	12	9

■ 欧州地域

国名	JV	SV
セルビア	1	2

■ 中東地域

国名	JV	SV
エジプト	18	3
モロッコ	24	7
ヨルダン	30	

■ 中南米地域

国名	JV	SV	日系JV	日系SV
アルゼンチン		16	10	8
ウルグアイ		8		
エクアドル	55	5		
エルサルバドル	8			
グアテマラ	28	3		
コスタリカ	31	10		
コロンビア	14	16		
ジャマイカ	18	13		
セントビンセント	5			
セントルシア	17			
チリ	6	5		
ドミニカ共和国	33	7	4	1
ニカラグア	1			
パナマ	20	1		
パラグアイ	45	2	11	3
ブラジル			76	21
ベリーズ	14			
ペルー	50	5		
ボリビア	54	3	1	1
ホンジュラス	32			
メキシコ	1	9		

■ 合計

	JV	SV	日系JV	日系SV	小計
派遣中 (男性/女性)	1,977 (879/1,098)	286 (205/81)	102 (36/66)	34 (11/23)	2,399 (1,131/1,268)
累計 (男性/女性)	44,775 (23,855/20,920)	6,472 (5,238/1,234)	1,475 (563/912)	542 (252/290)	53,264 (29,908/23,356)

JV = 青年海外協力隊
 SV = シニア海外ボランティア
 日系JV = 日系社会青年ボランティア
 日系SV = 日系社会シニア・ボランティア (単位: 人)

■職種別索引	掲載ページ
コミュニティ開発	14
きのか栽培	24
青少年活動	22
野球	4
PCインストラクター	18
数学教育	16
小学校教育	6、8、10、28
文化財保護	25
服飾	26
助産師	4
理学療法士	20
障害児・者支援	36

■国別索引	掲載ページ
ガーナ	18
カメルーン	10
キルギス	20
グアテマラ	4、6
ザンビア	26
ソロモン	16
ブラジル	4
ベトナム	25
ベナン	8
ペルー	14
マレーシア	24
モザンビーク	22
モロッコ	36

■出身都道府県別索引	掲載ページ
北海道	20
埼玉県	24
東京都	16、22
神奈川県	14
富山県	10
大阪府	8
山口県	36
福岡県	18
長崎県	26
鹿児島県	25
沖縄県	6

【凡例】

- ① JICA海外協力隊の方々（経験者を含む）については、次のように表記しています。

国際協子さん（ウガンダ・青少年活動・2018年度3次隊）

氏名	派遣国	職種	隊次
※「青年海外協力隊」以外のJICA海外協力隊「シニア海外ボランティア」「日系社会青年ボランティア」「日系社会シニアボランティア」の方々は、括弧内の冒頭に「SV」「日系JV」「日系SV」と記しています。			

- ② JICAの「企画調査員（ボランティア事業）」については、「VC」と表記しています。

本誌は、JICA海外協力隊が現地での活動・生活を円滑に行うための実践的な情報、および帰国後の進路開拓や社会還元に関する有益な情報を提供し、対象者に配布しています。

ロゴタイプデザイン：S+M DESIGN FACTORY
レイアウト：S+M DESIGN FACTORY
印刷・製本：弘報印刷（株）

4

JICA Volunteers' NEWS

- ▶プロ野球独立リーグの選手による野球教室（ブラジル）
- ▶AMDAの母子保健プログラムと連携し、「伝統的産婆」に対して研修会を開催（グアテマラ）

特集1

小学校教育分野の活動ポイント

6

CASE 1 算数

小波蔵政芳さん（グアテマラ・小学校教育・2016年度3次隊）

8

CASE 2 図工&体育

西口記子さん（ベナン・小学校教育・2016年度1次隊）

10

CASE 3 音楽

吉田詩甫子さん（カメルーン・小学校教育・2016年度2次隊）

12

活動Q&A集

特集2

“任期終盤”の心構え

14

CASE 1 活動の仕上げ①

田崎丸美さん（ペルー・コミュニティ開発・2016年度2次隊）

16

CASE 2 活動の仕上げ②

丸山祥恵さん（ソロモン・数学教育・2016年度2次隊）

18

CASE 3 プラスαの活動①

小塚千秋さん（ガーナ・PCインストラクター・2016年度2次隊）

20

CASE 4 プラスαの活動②

中村恵理さん（キルギス・理学療法士・2016年度2次隊）

22

“失敗”から学ぶ

青木 泉さん（モザンビーク・青少年活動・2016年度2次隊）

24

希少職種図鑑

- ▶きのか栽培 三田 岳さん（マレーシア・2015年度3次隊）
- ▶文化財保護 主税和賀子さん（ベトナム・2015年度1次隊）

26

JICA Volunteer's Before ▶ After ~人生を変えた2年間~

ヨガイインストラクター 松尾佳世子さん（ザンビア・服飾・2010年度4次隊）

28

OB・OG匿名座談会

小学校教育隊員篇

30

JICA海外協力隊のプチテクガイド

アイスブレイクの手法/アンガーマネジメント/写真を楽しむ

32

INFORMATION

34

JICA海外協力隊のつぶやき

お題：「日本食」

35

JICA進路相談カウンセラー／青年海外協力隊相談役の紹介



高知ファイティングドッグスのスタッフから、内野ゴロを取るポイントを教わる生徒

開催の流れ	
(1カ月前) 企画	高知ファイティングドッグス球団からブラジル3都市での野球教室開催のお話をいただく。
(3週間前) 内容の説明	配属先関係者へ企画の経緯や内容について説明し、参加者を募る。
(2週間前) メニュー作成	参加者の人数や年齢に合わせて当日のメニューを作成し、コーディネーターやほかの開催地の隊員と共有。
(1週間前) 打ち合わせ	配属先の方々と当日のメニューや動きについての確認。
(当日まで) 最終確認	実施にあたっての道具など準備や参加者の最終確認。

高レベルの野球に接する機会を現地の選手に！ Brazil プロ野球独立リーグの選手による野球教室

文 = 山本駿弥さん(日系JV/ブラジル・野球・2018年度1次隊)



高知ファイティングドッグスの選手へ質問を投げかける生徒たち

私はブラジル日系社会において、野球隊員として青少年の育成・日本文化の継承を目的とし、野球の普及・技術指導を主とした活動を行っております。2018年12月10〜12日の3日間、^{*}四国アイランドリーグplus所属の高知ファイティングドッグス球団(以下、高知FD)による野球教室が、私を含めた野球隊員の任地であるパラナ州ロンドリーナ市、クリチバ市、マツトグロソ州クイアバ市の3都市で計約200人を対象に開催されました。

高知FDは18年5月に、JICA日系研修『野球指導者の人材育成』コースの実施機関として、南米の野球指導者を受け入れた経験があり、この度、同コースの帰国研修員であり、現在はサンパウロ州内のクラブチームで少年野球の指導を行っているTetsuro Watanabe氏を通して野球教室開催のお話をいただきました。

ブラジル国内にプロリーグはなく、テレビでの野球放送もありません。サンパウロ州内に野球アカデミーがあるものの、我々の任地である地方の選手たちが高いレベルの野球を見る機会ほとんどないのです。その様な環境でプレーする選手たちにとって、今回の野球教室はプロの選手から実際に指導を受ける貴重な体験となりました。

この野球教室のお話をいただいてから実施までの期間、我々野球隊員は当日参加する選手の人数や年齢を考慮した内容・スケジュールの作成といった準備を行いました。私は自身の任地であるクイアバ市での開催に向け、3時間という限られた時間の中で、参加する選手ひとりひとりがどのような学びを得ることができるか、また今彼らが日本のプロの選手たちから学ぶべきことは何か、といった点を踏まえながら、メニュー作成に時間を費やしました。

その甲斐あってか、野球教室当日は約70人が参加。参加選手たちは終始質問を投げかけるなど、熱のこもった3時間となりました。参加選手の保護者も、今後子どもたちへの指導に生かそうと積極的に参加してくださいました。日系社会での開催ということもあり、日本に縁のある方も多く、日本のプロ選手による指導に興味を示されていきました。野球教室終了後、今回学んだ練習方法を自ら継続して実践している選手や、私に「日本でプロを目指したい」と言う選手も現れ、今回の野球教室が選手たちに与えた影響の大きさを感しました。

今後も今回学んだことを生かして選手たちの成長を図ると同時に、日本でプロを目指す様な選手が出てくることを期待しながら活動していきます。

* 四国アイランドリーグplus...四国4県を活動地域とするプロ野球独立リーグ。

開催の流れ	
(2週間前) 企画	研修会のテーマが決定。同県助産師へ協力要請。
(2週間前) 内容決定	内容決定後、役割分担を行い、各自準備へ。教材媒体の作成。
(1週間前) 調整	AMDAスタッフと具体的な内容調整。
(前日) 合同練習	同県助産師隊員が任地に来てくれ、AMDAスタッフと最終の打ち合わせ及び合同練習。
(当日) 開催	AMDAスタッフと協力して、研修会を実施。



コマドローナ(伝統的産婆)たちによる、妊産婦死亡率ゼロを願った「ゼロ体操」。「ゼロ体操」はAMDAがコマドローナたちに対して目標共有の意識付けのためにつくったもので、ワークショップ前のアイスブレイクなどで使用されている

AMDAの母子保健プログラムと連携し、Guatemala 「伝統的産婆」に対して研修会を開催

文 = 比嘉可苗さん(グアテマラ・助産師・2017年度2次隊)



劇を通して、胎盤遺残(産科出血)のメカニズムについて説明する比嘉さん(右端)と茂さん(右から2人目)

ニカラグアで妊婦に対する保健指導を開始して約8カ月、ようやく活動が軌道に乗ってきた頃、ニカラグアの情勢悪化に伴いグアテマラへ任国振替となりました。再スタートの地は、グアテマラ最貧県と言われているキチエ県。首都から山道と未舗装の道を6時間進んだところにある、住民の98パーセントが先住民のサン・バルトロメ・ホコテナンゴ市です。任地には病院がなく、町唯一の診療所の助産師隊員として、医療スタッフへの研修会や施設内の5S活動などを行っています。

任地では、2018年2月より日本の^{*}NGO AMDA・MINDS(以下、AMDA)のプロジェクトが始動しています。自宅出産率80パーセント以上と、「コマドローナ(伝統的産婆)」の役割が非常に大きいにもかかわらず、医療的知識が乏しく、妊産婦死亡率が高く推移している現状があります。そのため、コマドローナの知識の定着・強化が急務とされ、毎月研修会が開催されています。私は、活動の一端としてその研修の一部を担当しています。2017年、任地では産科出血が原因による妊産婦死亡がありました。以前、産科出血についての研修会で実施した研修後の確認テストの結果では、知識の定着が見受けられませんでした。この結果を受け、AMDAが再度産科出血に関するテーマで研修会を計画していた際に、助産師として私ができることがないか尋ねたところ、ぜひ協力してほしいとの依頼があり、研修会運営チームに加わることとなりました。

研修会実施にあたり、AMDAスタッフと何度も話し合いを重ね、また同県助産師隊員にも協力を要請しました。公用語の通じない先住民が多いため、目で見て理解できる媒体を活用し、テーマは「妊娠期の各期(初期・中期・後期)及び「分娩・産後の産科出血」を取り上げることになりました。劇では、診療所の医療スタッフやコマドローナも巻き込みながら進めていきました。参加者が興味を持って参加している様子が見られました。

コマドローナの妊産婦に関する知識向上やAMDA、診療所の日々の草の根活動の成果が実り、任地は2018年、3年ぶりに妊産婦死亡率ゼロを達成することができました。今年もこの数字を維持できるように、妊産婦やさまざまなアクターと手を取り合いながら活動していきたいと思えます。

*1 NGO AMDA・MINDS...国際人道支援活動を実施するNPO法人AMDAグループのひとつ。国外で社会開発の活動を展開し、日本国内では国際理解教育を通じた社会教育などを推進している。 *2 伝統的産婆...独自の経験あるいはほかの伝統的産婆に弟子入りすることによって出産介助技術を身につけた人。地域での妊娠・出産・産褥期(さんじょく)の重要なケア提供者となっている。専門的な教育を受けた医師や助産師のような保健医療専門職とは異なり、専門的訓練を受けておらず特に資格もない。 ※協力者:上里佳那子さん(助産師・2017年度2次隊)、茂佐知子さん(助産師・2017年度4次隊)

小学校教育分野の 活動ポイント

巡回指導や勉強会で、 現地教員の指導力向上を支援

県の教育事務所に配属された小波蔵さん。
小学校で系統立った算数授業が行われていなかったなか、
日本の協力で作られた教科書の活用を軸に、教員への技術指導に取り組んだ。

小波蔵さんの配属先は県の教育事務所。配属先では、2006年に日本の協力を受けてつくられた算数の国定教科書『Guatemala』（以下、「教科書」）の活用の定着を目指していたが、着任した当時は、ほとんど活用されていない状態だった。そうしたなかで小波蔵さんに求められていたのは、「教科書」の活用促進を含めて算数教育の質向上を支援すること。まずは配属先との話し合いにより、管轄する小学校のなかから巡回指導する学校を選定。授業を視察し、改善に向けた助言を行う形で活動をスタートさせた。

研修会や勉強会で問題の根が判明

巡回を開始した小波蔵さんは、すぐに大きな問題に気付く。既習事項を踏まえて新しいことを教えていくという、算数授業で重要な「系統性」を教員たちが意識していないことだ。「1年生の授業で掛け算を扱う」「掛け算が未習得の4年生に割り算を業は机に座らせて行うもの」という観念を持っていった現地教員たちには新鮮な授業であり、児童たちの反応も良かったことから、積極的に取り入れてくれる教員も現れた。

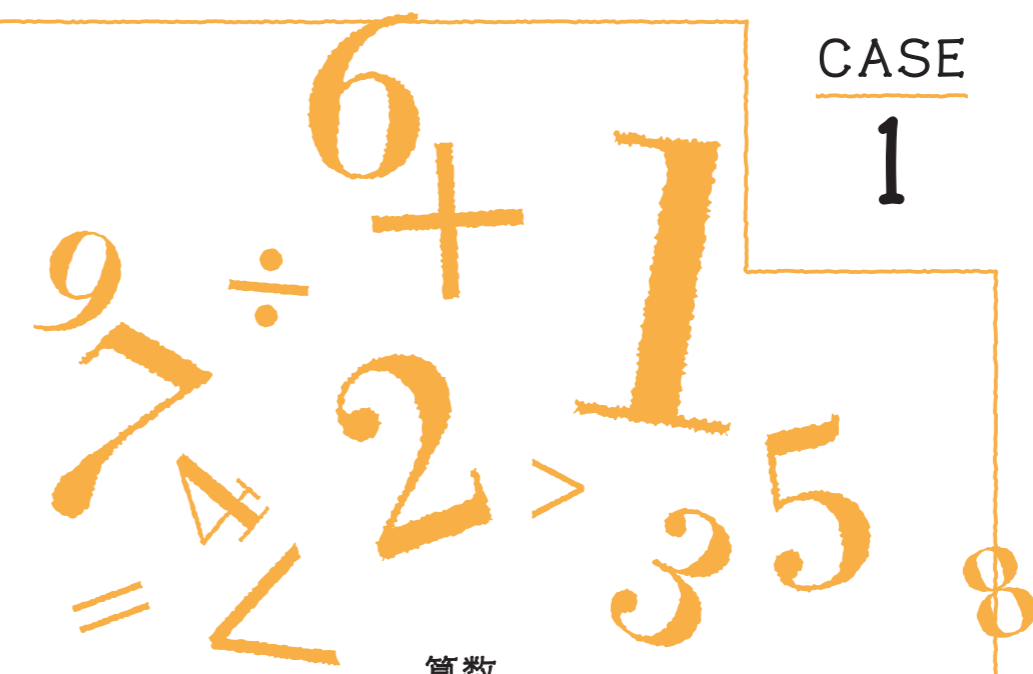
板書技術の上達

小波蔵さんは巡回先で「板書指導」にも力を入れた。単元名を書かなかつたり、黒板の真ん中から書き始めるなど、板書に「戦略が見られない教員が大半だったためだ。小波蔵さんは、「板書の質が上がれば、児童たちの理解も高まる」と、板書計画の重要性を力説し、自ら手本を示した。すると、なかには手本を真似ながら徐々に質の高い板書ができるようになっていく教員が現れてきた。そこで小波蔵さんは、そうした教員の板書をほかの教員に紹介。「自分の板書と比べてどう思いますか？」と鼓舞した。有効だったのは、紹介した板書の主である教員に、「論理的にまとめられるようになったこと、児童の理解が深まった」などと、手応えを自らの言葉でほかの教員に伝えてもらったこと。それをきっかけに、教員同士で授業に関する意見交換をする姿

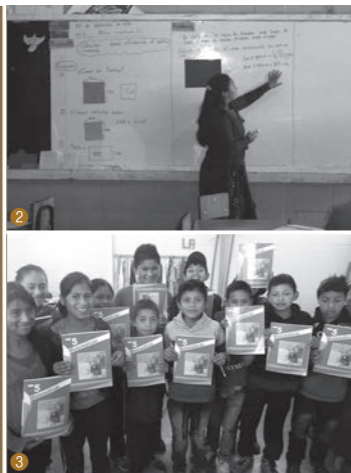
「見えるようになったのだ。板書の技術が上達した教員が現れたのを受け、彼らが講師役となる「研究授業」を実施したのは、任期も残すところ3カ月ほどとなったころ。対象は県内の小学校の教員だ。講師役は巡回先の教員2人に務めてもらった。算数の基礎学力すらおぼつかなかった教員たちが、板書計画を立て、「教科書」を活用した授業を披露する。その姿が受講した教員への刺激となっただけでなく、講師役を務めた教員たちにとっても、自信を深める体験となったようだった。

以上のように、現地教員へのアプローチを試みては、その都度、彼らが抱える問題への理解を深め、新たなアプローチの方法を発見し、実践するということを重ねていった小波蔵さん。そうした地道な活動の結果、当初は1割程度だった「教科書」の使用率が、任期を終えるころには巡回先のほぼすべての教員が活用するまでになった。ここまでの立派に授業が行えるようになったのだから、以前の状態には戻らず、リーダーシップを取り続けてほしい。この言葉を巡回先の教員たちに置きみやげとして残し、帰国の途に就いたのだ。☑

協力隊員が活動する小学校の多くに共通する課題のひとつは、現地教員たちの知識や経験、意欲の不足。一朝一夕には解決できないこの課題に、隊員はどのようなアプローチをすることが可能だろうか。本特集では、各種教科に関してこの課題に取り組んだ事例を取り上げ、その有効な解決策を探る。



算数



を巡回先で開くことにした。開催時間は放課後。ところが、出席率は低迷する。欠席した教員にその理由を尋ねると、返ってくる答えは「手当が出ないのなら出席の義務はない」「これまでの授業方法で問題はない」といったものばかり。「授業に対する教員たちの意欲の薄さ」という、問題のさらに深くにある根が見えてきたのだ。そうして小波蔵さんは、授業に対する彼らの意欲を引き出す策を模索する。注目したのは、「算数を学ぶ意義」について彼らはどう考えているかという点だ。例えば、6年生の授業で整数の掛け算ばかりを扱う教員に対し、『教科書』では6年生で『分数』の掛け算を扱うことになっていると指摘すると、『分数』は生活で役に立たない」という答えが返ってきた。彼らは「生活に役立つかどうか」を基準に「学ぶべき事柄かどうか」を判断しているのだ。そこで小波蔵さんは、「数」や「図形」の概念と「生活」とのつながりがわかるようなアクティビティを、巡回先の教員に紹介してみるようになった。「教室の中で『垂直』を探す」「教室の中にある『円』の直径を測る」といったものだ。すると、「授

- ① 放課後の勉強会で現地教員に板書計画のアドバイスをを行う小波蔵さん
- ② 小波蔵さんが任期終盤に行った研究授業で講師役を務める現地教員
- ③ 小波蔵さんが普及に取り組んだ算数の国定教科書『Guatemala』を手にする児童たち

事例のポイント

まずはやってみる!

本事例では、「研修会」や「勉強会」など、現地教員へのさまざまなアプローチを積極的に試みては、その都度彼らが抱える問題への理解を深め、よりよいアプローチの方法を発見。「まずはやってみる」という姿勢が功を奏した事例と言えるだろう。



こはぐらまさよし
小波蔵政芳さんの事例
(グアテマラ・小学校教育・)
2016年度3次隊

Profile

1986年生まれ、沖縄県出身。大学を卒業後、公立小学校に教員として勤務。2016年12月、協力隊員としてグアテマラに赴任。18年12月に帰国。

活動の概要

- トニカパン県教育事務所に配属され、小学校での算数教育の充実化に向けて、主に以下の活動に従事。
- 国定教科書『Guatemala』の普及
- 現地教員自身の基礎学力向上を目的とした勉強会の開催
- 現地教員を対象とした授業技術の研修会の実施
- 研究授業の実施



- 1 西口さんが配属先と協力して開催した図工授業の教員研修会の受講者たち。掲げているのは、自分たちで製作した折り紙の風車
- 2 図工授業で製作した段ボールの時計を持つ児童たち
- 3 運動会で組体操を演じる児童たち
- 4 運動会の「ボール運び」。ボールの代わりに道端になっているオレンジを、載せて運ぶ台はアフリカ布を使った

事例のポイント

材料や道具は現地で調達を！

図工や体育の授業を継続してもらうためには、入手可能な材料や道具の発見・提案がカギとなる。本事例では、運動会の「玉入れ」の玉は、乾燥トウモロコシをアフリカ布で包んだもの。洋裁の授業で児童たち自身が作った。



図工&体育
「指導書」と「運動会」により、
実技教科が浸透

西口さんの要請内容は、小学校の実技教科の充実化に向けた支援。教員たちの知識・経験の不足から、授業がほとんど実施されていなかったなか、「教員用指導書」や「運動会」を糸口に、図工と体育の定着を図った。

図工授業の定着に向けて

市の視学官事務所に配属された西口さん。市内の小学校では、実技教科が時間割に組み込まれていないもの、授業は定期的には実施されていなかった。教員たちには実技教科の授業を受けた経験がなく、指導法の知識が乏しいこと、および道具や材料が不足していることが、その主な理由だ。そうしたなかで西口さんに求められていた活動は、教員たちと協力しながら、主に「図工」と「体育」の授業の実施・定着を支援することだった。

小学校の長期休暇と着任の時期が重なっていたため、西口さんは休暇明けに向けて図工授業の教材をつくることから活動をスタートさせた。配属先にとって西口さんは初の協力隊員。そこで、市内の教育関係者に自分のことを知ってもらうため、製作した教材とそれに関する説明書を配属先に提示させてもらうことにした。すると、次第に市内の小学校の校長たちに西口さんの存在が知られるようになり、なかには「ぜひ図工を教えるに来てほしい」と、自校への巡回指導を要望する校長も現れたのだ。

配属先からの要望を受けてのことだった。

受講者は、市内の小学校の教員約100人。巡回先でもとりわけ評判のよかった「折り紙」「紙のパッチワーク」「アフリカ布のバッチワーク」の3つの授業を紹介した。講師役は、西口さんと共に授業を行った巡回先の教員たちに担当してもらった。

研修会では、教員用指導書を配布し、活用を促すことも狙った。その点でひと役買ってくれたのは、講師を務めた教員たち。西口さんと授業を行った経験をもとに、自分たちが感じた指導書の有用性を説いてくれたのだ。同じベナン人教員の口から聞く説明に受講者も納得がいった。その後、研修会の後に受講者たちの学校を回った際には、彼らの変化を実感。指導書を参照して図工授業に挑戦し始めた教員、指導書を手に入れた西口さんに授業のサポートを依頼する教員などが現れたのだ。なかには、学校全体で改めて図工授業の意義を話し合い、実施に向けた準備をしている学校もあった。

体育授業の定着に向けて

西口さんは巡回指導を始めた当初から、体育授業の充実化支援も進めていった。その手段としたのは「運動会」だ。運動会という明確な目標を立て、それに向けた各種競技の練習を体育授業の中で行う。そうすれば児童の成長過程がより見えやすくなるため、体育授業を受ける機会がなかった教員たちにも、体育授業に対する意欲や、その意義に対する理解を持ってもらいやすくだらうと考えたのだ。



にしぐきこ
西口記子さんの事例

(ベナン・小学校教育・)
2016年度1次隊

Profile

1992年生まれ、大阪府出身。2016年3月に大阪教育大学を卒業後、同年6月、協力隊員としてベナンに赴任。18年6月に帰国。19年1月より、アジア系エアラインの客室乗務員として勤務。

活動の概要

モノ県水エヨベ市の視学官事務所に配属され、主に図工と体育の授業の定着を目的に、小学校を巡回して以下の活動に従事。

- 図工授業の支援
- 図工授業の教員用指導書の作成(教育分野の隊員による分科会活動として)
- 教員対象の図工研修会の開催
- 体育授業の支援
- 運動会の開催(2校で計3回)

「教員用指導書を活用した支援」

西口さんが巡回指導を始めた当時、市内の小学校で行われていた図工授業は、いずれも絵画に限られていた。そこで西口さんは、授業内容のバリエーションを広げてもらうため、「身近にある材料」を使った工作のアイデアを紹介することにした。道具の扱いに不慣れた教員が多いことから、まずは手本を西口さんが示した後、教員にそれを補う説明をもらうという形のチームティーチングを各校で進めていった。

この活動で活用したのが、ベナンで活動する教育分野の隊員たちと共に分科会活動として作成した教員用指導書だ。経験が乏しくても授業が行えるよう、道具の扱い方をはじめ、授業案や指導のポイントなどをやさしく解説しているもの。その特長のひとつは、「現地に即した授業アイデア」を盛り込んでいる点だ。例えば、同国の市場で売られており、安価で入手できるアフリカ布を使ったパッチワークなどである。

「研修会の開催」

巡回指導を始めて1年ほど経ったころには、巡回できていない学校の教員への指導を目的に、図工授業の研修会を実施した。

西口さんは巡回先の職員会議の席で、運動会の開催、およびそれに向けた練習を体育授業の中で行うことを提案。「運動会で行う団体競技の練習を通じて、児童たちには仲間意識が芽生え、互いを思いやる心を育むことができる」など、運動会の効果については文書にまとめて教員たちに配布した。さらに、日本の運動会の映像や写真も見てもらった。

そうして開催が決まると、約4カ月にわたって体育授業での練習を実施。盛り込んだ種目は、「綱引き」「台風の目」「玉入れ」「組体操」「リレー」「ボール運び」などだ。運動会を経験していない教員たちは、運動会に向けた体育授業を始めた当初こそ、練習から本番までの一連のプロセスが想像できない様子だった。一方の児童たちも、最初は未知の競技に戸惑う様子を見せていた。しかし、ルールがわかり、競技の楽しさを感じることができるようになると、児童たちは集中して練習に取り組むようになっていく。すると、児童の変化を目の当たりにした教員たちの指導も、次第に熱が増していくのだった。

当日は、競技に懸命に取り組む児童たちの姿が見られ、日本の運動会さながらの光景が広がった。西口さんは、自身の帰国後を見越し、運動会当日の運営は、必要な役目を教員たちに割り振り、彼らが主体となって進めてもらうよう努めた。

西口さんの任期中、以上のような運動会の試みが、2校で計3回実現。練習から当日の運営まで、運動会を丸ごと経験した教員たちは、その後の自力での継続に意欲を見せてくれたのだ。



事例のポイント

児童の変化を証拠に！

実技教科の重要性を理解してもらうためには、口頭で説明するよりも、「児童たちの変化」を実感してもらうのが早道。本事例では、「合唱コンクール」によって、児童たちの「協力してひとつのものを創り上げる」という力の成長を示すことができた。



音楽

楽器要らずの音楽授業を提案し、初の「合唱コンクール」を開催

県の初等教育事務所に配属された吉田さん。「スマートフォンの活用」などの工夫によって音楽授業の充実化を図り、初となる合唱コンクールの開催を実現させた。



よしだしほこ 吉田詩甫子さんの事例

(カメルーン・小学校教育) 2016年度2次隊

Profile

1991年、富山県出身。大学卒業後、臨時的任用講師として中学校と小学校に勤務。2016年9月、協力隊員としてカメルーンに赴任。18年9月に帰国。

活動の概要

- ニヨン・ケレ初等教育事務所に配属され、小学校で以下の活動に従事。
- 体育、音楽、図工、保健等の巡回指導
- 絵画展、合唱コンクール、運動会などの学校行事の企画・運営
- 教員や指導主事向けの研修会の企画・運営補助

吉田さんが配属されたのは、ニヨン・ケレ初等教育事務所。同国では、2002年に初等教育が無償化され、重点課題のひとつに「情操教育の充実」が掲げられている。しかし、配属先が管轄する小学校の大半では、教員たちの知識や経験の不足、あるいは道具の不足により、実技教科の指導に苦戦していた。そうした現状のなかで吉田さんに求められていたのは、小学校を巡回し、実技教科の授業を充実化させる支援を行うことだった。

「音楽の基礎の指導」

吉田さんが力を入れて取り組んだ教科のひとつが音楽。教員たちには「音程」や「リズム」など音楽に関する基本的な知識が欠けており、学校には楽器もない。そのため、授業は簡単な歌を繰り返し教えるばかりとなっていた。

音楽授業の充実化に取り組むに当たって吉田さんが考慮したのは、準備などの負担ができるだけ少ない授業方法を提案すること。教員たちの業務量は主要教科の分だけでも多かったため、負担が大きいと音楽授業の定着が見込めないと考えたのだった。吉田さんは、現地の教員と共に音楽授業

「スマートフォンの活用」

「楽器がない」。この壁への対処法として吉田さんが提案したのは、スマートフォンを楽器として使うことができる「楽器演奏アプリ」の活用だ。これは、画面にピアノの鍵盤が映り、タップした鍵盤の音が鳴る

というもの。スマートフォンを持つ教員がいることを知り、ひらめいたアイデアだった。教員たちにこのアプリの存在を伝えると、「ピアノがないので歌の伴奏を諦めていたけれど、これなら本物のピアノの代わりになるかもしれない。練習して授業に取り入れたい」と、前向きな反応が得られた。

スマートフォンは、ほかにも音楽授業で有効活用できる道があった。児童たちの歌やダンスを記録し、共有するためのツールとすることだ。吉田さんの授業を録画し、それを参考にしながら、吉田さんが指導していた歌やダンスを自分の授業で教える教員が出てきたのだった。

楽器演奏アプリについては、結局、「スマートフォン」の扱い自体に慣れていない「アプリをダウンロードできる料金プランに入っていない」などの理由から、教員たちが授業で使いこなせるようになるまでには至らなかった。しかし、現地はスマートフォンなどIT機器の環境が急速に変化している最中。教員たちが今後、吉田さんが与えたヒントを土台に、音楽授業でのIT機器の活用を広げていく可能性は高い。

合唱コンクールを開催

吉田さんが、音楽授業の支援の一環として「合唱コンクール」を企画・実施したのは、任期も残り半年ほどとなった時期だ。それまで吉田さんが教員たちと行ってきた音楽授業は、児童の「表現」する力を養う内容がもつぱらだった。そうしたなか、他者の表現を「鑑賞」し、それを自らの表現へと生かしていくことの重要性を、教員や

児童に実感してもらおうとの意図で企画したのが合唱コンクールだった。

参加したのは、小学校4校と幼稚園1園。各クラスが1曲ずつ、振り付けとともに歌うこととし、審査員は各校の関係者に務めてもらった。各クラスが歌う曲は、吉田さん自身が選曲を担当。それまで授業で扱ってきた曲のなかから、そのクラスの力量に合った曲を選んだ。『きらきら星』や『ドレミのうた』などがその例だ。一方、振り付けは各担任教員とそのクラスの児童たちで自由に考えてもらうことにした。

合唱の経験が浅い児童たちにとって、「周囲と音程やリズムを合わせて歌うこと」は容易でない。そこで吉田さんが合唱コンクールに向け、新たに紹介した技術のひとつが、「音程の高低を手の上げ下げで表しながら歌う」というもの。視覚化により、音程のイメージを掴みやすくする技術だが、これが的中。児童が「正しい音程で歌えているか否か」をより強く意識し、音程やリズムがそろうようになっていったのだった。

迎えたコンクール当日。振り付けの創作を各クラスに委ねたことにより、発表はいずれも個性が際立つものとなった。他のクラスの歌を初めて聴く児童たちは、自分たちの発表に熱を込めるだけでなく、他のクラスの発表にも興味津々。「鑑賞」を体験させるという吉田さんの意図は的中した。合唱コンクールで児童が見せた成長もあってか、後日、教員たちを対象に実施したアンケートでは、「音楽教育の有用性を感じる」というコメントが多く寄せられたのだった。

このたび技術顧問を退任される荒木拓一さんに、技術顧問としてのご経験を振り返ると共に、JICA海外協力隊に向けたメッセージをお寄せいただきました。

協力隊技術顧問が回答 活動Q&A集

JICA海外協力隊への技術支援を目的に、分野ごとに配置されている技術顧問。派遣中隊員から寄せられた活動に関する相談と、それに対する技術顧問による回答の例をご紹介します。



回答者
あらきたくいち
荒木拓一さん
●JICA海外協力隊技術顧問
(担当分野:
小学校教育、教育行政・学校運営)
●元公立小学校長、元東京国際大学講師

「学習環境」や「学習習慣」形成の方法と同僚の勤務態度について

小学校で活動している
小学校教育隊員より

2点相談があります。1点目は、ゴミが目立つ教室、机が整頓されていない教室、始業時刻になっても子どもたちがなかなか授業を始められる状態にならないという、「授業以前の問題」が目立つことです。環境教育の必要性も感じています。
2点目は、「先生の勤務態度」です。授業が開始時刻に始まらない、私が授業に入ると授業への関与をやめてしまう、携帯電話が鳴ると授業を止めて外に出てしまう……。これらのことを直接注意したら、私が彼らの授業に入ること拒否され、話もしてくれなくなりました。
整った教室環境で、担任の先生と良い関係を保ち、授業ができるようにしたいと思っているのですが、これらの問題を解決するためにアドバイスをいただけますでしょうか。

Answer

「快適な学習環境作り、みんなが認め合い自主的に学習に取り組む学習規範作り」。日本の教室でもこれを目指して、小さな活動を連続させています。

登校から下校まで快適な教室環境を整えるために、朝教室の窓を開ける、教室のゴミを拾うなど、みんなで相談して「係分担」するのもそのひとつです。子どもの頃行った係活動を思い出しませんか。

子ども達は本来「頼まれごと」、「係活動」は好きなのです。一方「飽きやすい」という特性もあります。授業開始前に、「ひとり〇個ずつゴミを拾ってから授業をはじめましょう」ということをした記憶はありませんか？ 同様に「机は黒板の方に向かって向くように並べましょう」ということも。そして1時間の授業が終わると、黒板係などが自主的に活動をはじめます。取り立てて「環境教育」や「学習環境整備活動マニュアル」などといわずとも、意識した日常活動の継続でいつの間にかその習慣ができあがります。

教室を清掃する習慣のなかった学校に配属されて、自分の教室から始めた清掃活動が、学校全体の「清掃時間」として設けられ、地域を巻き込む活動にも広がったという報告もありました。焦らず、教室の中の小さな活動から、児童と先生、共に進めてみましょう。

担任の先生との件は、同僚という立場を超えて「友達」としてのお付き合いが大切な要素になるでしょう。いろんな会話の中から「相互理解」が進むことが大切です。ときにはお茶を飲みながら、食事を共にすることも良いでしょう。このように互いに理解が進めば、「携帯電話」のことも、「始業開始時刻の遵守」のことも、「授業進行方法」のことも、「教育活動上の共通の話題」として深く話ができるようになるはずです。

「話し10回よりお茶3回、お茶3回よりお酒1回」と揶揄されることもまだまだ「真」が隠されているのかもしれないですね。せっかくの機会です、任地でたくさんの方達を作ってください。

9年の在任期間、青年、シニア問わずたくさん素敵な大人に出会うことができました。どの国を訪れても、子ども達の前でするはつらつとした活動を観ることができました。

豊富な経験を生かして教員養成校で活動するシニアは、図画工作科指導法の授業で、斬新で具体的な指導手法を駆使されていました。教科学習として教わった経験さえない学生に、表現することの楽しさを伝える工夫一杯の指導は圧巻でした。

アフリカで活動していた若者は、1クラス100人を超える児童の興味を引きつけ、実に楽しそうに歌を歌い、リズム遊びをしていました。その授業時間中、一度も「叱る」ことがなかったのは見事で感動さえしてしまいました。

中米の若者達は、中南米広域研修と称して10に近い国々から協力隊員・カウンターパートの参集を得て、4、5日にわたる研修会を組織・運営し、充実した研修を作り上げていました。3年ごとに（3回目は1カ国での国内研修だったが）行われた研修主題は連続性がありました。単発で終わってしまいがちな研

修を、3年間をつなぐ「アクションプラン」を確認しあい、それぞれの任国での活動につなげようとしていた計画も見事でした。この研修会の企画力・経営力・運営力には素直に敬服してしまつたものです。

「愛、夢、希望、勇気」

たくさんの開発途上国への出張機会を通して、いつも強く感じたことはシニア、青年ともに、学生・子ども達に「生き方（行き方）モデル」としての大人の生き様を堂々と示す活動をしてきていたことでした。意識せ

ず行つたことなのでしょう。それでもその授業活動に心を揺るがされた学生・子ども達は、「こんな素敵な大人（教員）になろう」と、明確に、あるいは漠然とモデル化したはずなんです。そして間違いなく、進路選択に迫られたときには、協力隊員のはつらつとした姿をモデルにした選択をするはずなんです。まるで隊員から「遺伝子」を受け継いだようなんです。

ご自分の、今おこなっている活動の一つひとつを思い起こしてみてください。学んで新しく作り上げた指導法もあるのでしようが、自分が子どもの頃に「させられた」あるいは「みせられた」学習手法、授業法を無意識に真似をしていることに思い当たることはありませんか。自分で全て作り上げたと思いが、振り返ってみると、大好きな人をモデル化して活動していることがあるんです。

それほどまでに子ども達の前に立つ大人の影響は、成長期の子ども達に作用します。表題は、かつて私が教員だった時代に、学校に集う大人が教育活動に当たる「台言葉」としていたものです。

私達は、「子ども達に限りない愛情を注ぎ、21世紀を立派に背負う子ども達に夢をかけ、希望を持ち、自信に満ちた人生を歩むことを期待して教育活動を進めること」を目標としたいものです。経験の長短は大きくは影響しませんが、子ども達の未来に期待し、活動を試みる「心」意気と「情熱」こそが大切なことです。そのために、大いなる理想を掲げ、力強い一歩を、勇気を持って踏み出したいのです。皆さんの、次に踏み出す勇気ある一歩に期待しています。



図工作品展示を終えて、笑顔いっぱいのベナンの児童たちと現地教員

“任期終盤”の心構え

「それまでの活動の成果を定着させる」「蓄積してきた人脈や情報を土台に、新たな活動に挑戦する」……。任期終盤におけるこうした取り組みを、限られた時間のなかで充実させるためには、どのような心構えで臨むべきか？ 任期終盤が有意義なものとなった隊員の事例を通して、その要点をピックアップしてみる。

“任期終盤”の心構え

田崎さんの事例から



1 環境教育の授業を行う中学5年生の環境委員。ゴミが自然に与える影響について説明している
 2 中学5年生の委員による授業を真剣に聞く生徒たち
 3 田崎さんの授業を受けた環境委員には修了証を授与。授業を行うために必要な自信を持ってもらうのが狙いだ
 4 小学生を対象に、自作した土地の模型を使って環境教育授業を行う田崎さん

引き継ぎ手は「つくる」もの！

任期終盤にやるべきことのひとつは、それまで取り組んできた活動の「引き継ぎ」。配属先の同僚たちがその相手となり得ない状況ならば、ほかの誰かを引き継ぎ手に「育てる」という選択肢を検討する必要がある。

農村部にある町の役場に配属された田崎さん。着任の半年後に着手し、任期を通じてメインの活動となったのは、学校での環境教育だ。町ではゴミのポイ捨てが多かったうえ、資源ゴミを回収する団体が存在するにもかかわらず、住民によるゴミの分別が徹底されていなかった。そうした背景から、配属先は以前より環境教育に取り組みたいと希望していた

5 日本の「環境」事情

任期半ばに引き継ぎ法を検討

17年度いっぱいをかけて5校での環境教育を終えると、田崎さんはあらためて活動を振り返った。学校で18年度の授業が始まるのは、帰国まで残り半年あまりという時期。おのずと「帰国」が視野に入ってきた。17年度は、「できることは何でもやる」というスタンスで、自分が講師となって学校での環境教育を展開してきたが、それは自分の帰国後も継続されるべきもの。しかし、配属先の同僚たちには、引き継いでもらえる余裕がない――。

そこで田崎さんが着想したのは、「生徒が生徒に環境教育を行う」という仕組みをつくることだった。講師役になりうる目星を付けたのは、町内の中学校2校にあった「環境委員会」だ。存在を聞きつけ、顧問の教員を訪ねたことがあったが、「活動らしい活動ができていない」とのことだった。そこで田崎さんは、以下のような理由から、学校で環境教育を行うことを委員会の「伝統」にしようと考えたのだった。

- 教員たちには異動や退職があるため、彼らに環境教育の手法を伝えても、学校の財産として残らない。
- ペルーの中学生には、人前でも堂々と発言できる「大人っぽさ」がある。

もの、環境部門の担当者の手が回らない状態だった。そこで白羽の矢を立てられたのが田崎さんだった。現地の学校は、3月に年度の授業が始まり、12月に終わる。2016年10月に着任した田崎さんが学校での環境教育をスタートさせたのは、17年度の冒頭からだ。同年度に巡回したのは、小学校3校と中学校2校。主に最高学年（小学校は6年生、中

● 中学生は、近い将来、環境問題を含めた地域の問題の解決に取り組む主体となる世代である。

この構想について、配属先の環境課長も「いいアイデアだ」と賛同してくれたことから、田崎さんは早速2校を訪問。顧問の教員から実施の了承を得ることができた。

生徒が自作教材で授業

2校で最初に行ったのは、委員を相手にした田崎さんによる環境教育授業。それまでの授業で扱ってきた5つに1つ追加して計6テーマとし、6回の授業を行った。学校はいずれも午前と午後の2部制であり、授業は2部のはざまの時間帯を利用。学校側の都合に応じて、1校（A校）では主に高学年の委員を対象に、もう1校（B校）では低学年の委員を対象とした。

委員への授業が完了すると、すぐさま彼らは、ほかの生徒を対象とした授業の実践に移った。A校では、委員が手分けして全学年を対象に実施。一方、B校では、低学年の委員が高学年の生徒を相手に授業するのは難しいだろうとの判断から、委員がそれぞれ自分のクラスの生徒を対象に実施した。委員が行った授業は、田崎さんが行った6回の授業の内容を1回分にまとめたもの。時間は、授業の合間を利用した。

学校は5年生を対象とした。テーマを変えた5つの授業を1セットとするプログラムを、1週1テーマというペースで順次、各校で実施。時間は「理科」のコマを借りた。授業のテーマは次のとおり。

- 1 町のゴミ処理の現状
- 2 ゴミの分別の仕方
- 3 ゴミの分解にかかる時間
- 4 水の効果的な使い方

顕著だった。最初こそ、緊張で声が小さかったり、話す内容を忘れていたりして、田崎さんがサポートに入る場面もあったが、やがてリズムをつかむと、堂々とした立ち居振る舞いになっていくのだった。一方、受講する側の生徒たちも、同年代の仲間が行う授業を受けるのは初めての経験だったため、委員の講義に興味深く耳を傾けていた。

以上のように、講義をする生徒と受講する生徒の両方に刺激の大きかった「生徒対生徒」の授業は、彼らの後の行動変容にもつながった。顧問から「ゴミの分別が定着し、回収する団体に渡せる資源ゴミが多くなった」と報告が入ったほか、全校生徒で一斉に校内を清掃する日に田崎さんが学校を訪ねると、委員たちがリーダーシップを発揮している姿が見られたのだった。

田崎さんは委員を相手にした授業のなかで、黒板に貼る板書代わりの教材を彼らに自作してもらった。田崎さんが使っていた教材から要点をピックアップし、テーマごとにそれぞれ2枚の模造紙にまとめたものだ。それを委員たちは、自分たちが講師役となる授業で使用。両校の委員会が今後、それを代々受け継ぎ、生徒たちへの環境教育授業を継続していくこと、さらには両校が「モデル」となり、同様の取り組みが他校へと広がっていくことが、田崎さんの期待するところだ。

中学校の「環境委員会」を環境教育授業の担い手へと育成

町役場に配属され、町内の小・中学校で環境教育に取り組んだ田崎さん。同僚たちにその取り組みを引き継いでもらうのが難しかったなか、「生徒が生徒に環境教育授業を行う」という仕組みをつくり出した。



CASE 1

活動の仕上げ①

たきまるみ
 田崎丸美さん
 (ペルー・コミュニティ開発・2016年度2次隊)
 の事例

田崎さん基礎情報

PROFILE
 1990年生まれ、神奈川県出身。大学卒業後、市役所に事務職で勤務。2016年10月、協力隊員としてペルーに赴任(現職参加)。18年10月に帰国し、復職。

活動概要
 農畜産業が盛んなビウラ州タンボグランデ町の町役場に配属され、主に以下の活動に従事。
 ●小・中学校での環境教育の実施
 ●農業観光ツアーの企画・実施
 ●小学校での折り紙の指導

丸山さんが配属されたのは、日本の中学1年生から大学1年生にあたる7学年で構成される学校。1学年が1、2クラスずつという規模だった。数学科の現地教員は3人。コマ数に対し人数が不足していたことから、一教員として数学の授業を分担することが丸山さんのメインの活動となった。着任の3カ月後に始まった2017年度に担当したのは、2、3年生の授業。翌18年度には、1、2年生の授業を担当した。

人間関係が出来たのを見計らって 課題の指摘をスタート

中等学校で数学教育の支援に携わった丸山さん。同僚教員がみな年上だったことから、当初は自分の授業に専念したが、彼らとの人間関係が出来上がると、課題の指摘を試みるようになっていった。

書の方法など、同僚の数学科教員たちの授業には課題も多かった。丸山さんは彼らへの技術指導も行いたいと考えたが、いずれも丸山さんより年上。そのため、当初はアプローチの方法をつかみあぐねた。「職員会議の後に、数学科教員たちだけで意見交換する場を設ける」といったことも検討したが、「時間を割いてほしい」と強く要望するのはためらわれた。そうして最初に試みたのは、「背中語る」という方法だ。まず、丸山さんが空き時間に数学科教員た

ちの授業を見学させてもらう。すると反対に彼らが丸山さんの授業を覗くようになり、そこで見た授業方法を真似るようになる。そんな流れをつくろうと画策した。しかし、彼らが丸山さんの授業を覗くようになつたものの、真似てくれるようになった授業方法はわずかだった。
チームティーチングを開始
「背中語る」だけではだめだ。17年度の授業が終わると、丸山さん



CASE 2

活動の仕上げ②

まるやま さちえ
丸山祥恵さん
(ソロモン・数学教育・2016年度2次隊)
の事例

丸山さん基礎情報

PROFILE

1989年生まれ、東京都出身。大学卒業後、数学科教員として公立中学校に3年間勤務。2016年10月、協力隊員としてソロモンに赴任。18年10月に帰国。

活動概要

ウェスタン州立ビウラ中高校に配属され、主に以下の活動に従事。

- 数学授業の実施
- 数学科教員に対する助言
- 全校生徒を対象とする計算コンテストの企画・実施

はこう反省した。補習やクラブ活動など、授業以外の時間も生徒たちのために割き、彼らとの関係はきわめて良好だった。それだけに、「生徒たちとの『学園ドラマ』に陶醉しているだけではないか。数学科教員たちに十分なアプローチができないまままで終わってしまったのか」と自分を責める気持ちは強かった。そうして、18年度は同僚との「チームティーチング」を実現しようと決意。現地語の力も上がり、込み入った内容の会話ができるようになっていたことも、教員へのアプローチを強める勇気を後押しした。

たのは、任期が残り半年ほどとなった時期。その場所は、数学科教員が控え室としていた「教材室」だ。「私は自分の授業でこんな板書をしていきます。あなたの板書とは違うのだけれど、どう思いますか？」などと切り出し、「数学談義」に引き込む。それを繰り返すうちに、やがて彼のほうから、「次の授業で扱うこの単元は、こういう板書がいいだろうか？」などと尋ねてくれるようになっていった。そうした2人のやり取りは、ほかの数学科教員たちを刺激。丸山さん抜きで数学談義を行う姿が見られるようになっていった。

員も現れたが、まもなくそれも飽きられ、元の状態に戻ってしまった。「『背中』ではなく、『言葉』で語る」。勤務態度の改善の働きかけについて丸山さんがこう決意したのも、やはり任期終盤にさしかかった時期だ。たとえ教員たちに煙たがられ、人間関係がぎくしゃくしてしまっても、まもなく帰国なのだから構わない、伝えるべきことはしっかり伝えて帰ろう。そう覚悟を決めたのだった。ただ一方では、それまでに教員たちとはプライベートの面でも、やり取りを深めてきたという自負もあったため、「人間関係は簡単には壊れないはず」との期待もあった。そうして丸山さんは、教員が遅れ

うと目星を付けたのは、3、4年生の授業を担当することになっていた男性教員（以下、Aさん）。「私は現地語での説明が苦手なので、その方法を学ぶために授業に入らせてほしい」。そう打診すると、彼は快諾。学校側にも2人の授業の時間が重ならないような時間割にしようということができたことから、丸山さんは彼の授業に毎回入れることとなった。

数学科教員へのアプローチ以外にも、任期半ばに丸山さんが『『背中語る』だけではだめだ』と反省したことがあった。「勤務態度の改善」に関する全教員への働きかけだ。教員の宿舎は学校の敷地内であり、彼らの通勤の負担は小さい。にもかかわらず、丸山さんの着任当時、1時間目の授業に出てくる教員はわずか1、2人という状態だった。そこで丸山さんは、自分自身がモデルになろうと、遅刻や早退をしない勤務態度を徹底。しかし状況は変わらない。朝、メガホンで「朝ですよ」と叫びながら敷地内を回るといったことも試してみた。しかし、最初こそおもしろがって早めに出勤する教

員も現れたが、まもなくそれも飽きられ、元の状態に戻ってしまった。「『背中』ではなく、『言葉』で語る」。勤務態度の改善の働きかけについて丸山さんがこう決意したのも、やはり任期終盤にさしかかった時期だ。たとえ教員たちに煙たがられ、人間関係がぎくしゃくしてしまっても、まもなく帰国なのだから構わない、伝えるべきことはしっかり伝えて帰ろう。そう覚悟を決めたのだった。ただ一方では、それまでに教員たちとはプライベートの面でも、やり取りを深めてきたという自負もあったため、「人間関係は簡単には壊れないはず」との期待もあった。そうして丸山さんは、教員が遅れ

くなるのを恐れたからだ。課題の指摘をするようになって

「伝えるべきことを伝える」

結局、彼らの勤務態度はほとんど変化が見られないまま、丸山さんの任期は終了。しかし任地を発つ日、並んで見送る同僚教員の中からひとりが飛び出してきて、丸山さんを抱擁。涙を流しながらこう言ってくれた。「あなたのように働けなくてごめんね」。伝えようとしてきたことが彼らの心の中に刻まれていたこと、いつかそれが彼らの行動変容へとつながっていく可能性もあるというのを感じられた瞬間だった。

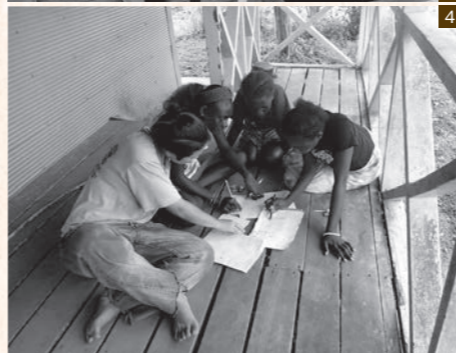
“任期終盤”の心構え

丸山さんの事例から

「マンパワーだけ」から脱却!

技術を伝えるべき相手が隊員より年上の場合、当初からアドバイスを聞いてもらうのは容易ではないだろう。まずは地道に人間関係を築き、それを土台に任期の終盤、集中的に技術のアドバイスを行うというの、ひとつの戦略だ。

- 1 任期後半に丸山さんがチームティーチングを行ったAさん。立体的な授業では、丸山さんが紹介した「展開図」を取り入れてくれるようになった
- 2 任期終盤、教材室ではAさん(左)をはじめとする数学科教員たちの数学談義が自然と始まるようになった
- 3 配属先での最終報告会で使ったプレゼン資料の最終ページ。それまで彼らに伝えようと努めてきたことを、ここでもあらためて「言葉」で表現した
- 4 配属先の寮は学校の敷地内であったことから、丸山さん(左端)は時間を問わず生徒たちの勉強に付き合った
- 5 数学の定期テストに取り組む丸山さんの教え子たち





1 任期終盤に開いた「検索大会」の様子。観戦する生徒が自分のスマートフォンで検索に取り組む姿も見られた
2 「検索大会」の会場。選手は前方で検索に取り組み、そのパソコン画面をスクリーンに映し出して観客にも見えるようにした
3 基礎科目としてのICT授業を行う小塚さん
4 ICTコースの専攻科目の授業。パソコンのマザーボードに搭載された部品を取り外す練習をしている

“任期終盤”の心構え

小塚さんの事例から

活動の取捨選択を!

予期せぬ事態により、計画どおりに進まないのは協力隊活動の常。任期終盤は、「どの活動も中途半端で終わってしまった」ということのないよう、取捨選択をして臨むことが重要だろう。

■ 小塚さんの配属校から遠くない職業訓練校に出場を打診する。
■ 競技は「ICT」「家政」「電子」その他」の4部門を設置。各分野の仕事で必要となる知識についてクイズを出し、インターネットで調べて答えさせるといふものにする。
■ 出場校は各部門に2人ずつ代表選手を出す。
■ 各部門の競技時間が30分程度となるよう、出題数は5問程度とする。
■ 検索エンジンは「Google検索」を使用する。

■ ガーナのクイズ番組に倣い、解答権が順に移っていき、正解した学校に点数が入る方式とする。
■ 出場を表明したのは4校。小塚さんは週に1回のペースで各校を回り、選手の選抜など準備を進めるよう促した。出題するクイズの難易度を決めるため、各校で一部の生徒を対象にした検索スキルのテストも実施。そうして実際に出題したのは、「このエクセル関数の意味は?」（ICT部門）や「サバに一番多く含まれている栄養素は?」（家政部

門）といったクイズだ。
■ 以上のような準備を経て、小塚さんの任期終了まで残り2カ月という時期に大会は実現。1校が直前に辞退し、最終的に小塚さんの配属校を含む3校の戦いとなった。競技中は、代表選手が一心不乱に検索に取り組むだけでなく、観戦している生徒が自分のスマートフォンを使って検索に取り組み姿も見られ、「『検索』は『術』のひとつ」と実感してもらえ、機会となったようだった。

■ 午後には、引率で来ていた各校のICT部門の教員とエレクトロニクス分科会のメンバーとで、授業に関するアイデアを交換するミーティングを開いた。話し合ったポイントは、「パソコンが無い状況で、パソコンの授業をどう進めるか」「パソコンの授業をどう進めるか」など。生徒のためになると考えて企画した検索大会が、同時に学校を超えた教員たちのネットワークを生む場ともなったのだった。

職業訓練校の間で 検索スキルを競う大会を開催

小塚さんがICT部門の教員として配属されたのは、4年制の職業訓練校。1学年の生徒数が百数十人という規模だった。ICT部門の教員が担当することになっていたのは、ICTコースの専攻科目の授業と、全コースの基礎科目であるICTの授業。着任当時、同部門に現地教員が配置されていなかったため、小塚さんは当初からすべての授業を一手に引き受けることとなった。その数は、週に27コマ（1コマは2時間）。

一方、時間割は週15コマ。同じ時間に複数の授業をこなさなければならぬという状態だった。

現地教員が配置されたものの

現地教員に技術を伝えたい——。小塚さんは当初からそんな思いを持ち続けた。しかし、ICT部門に現地教員が配置されることのないまま、任期は半ばに到達。そこで新たに、新たな活動に挑戦できる可能

性が生まれる。「インターネットの検索スキル」を競う大会の開催だ。基礎科目のICT授業は1回の受講者が100人を超えたが、パソコン教室にあった使用可能なパソコンはわずか10台ほど。しかも、同じ時間に同じパソコン教室でICTコースの専攻科目の授業も行わなければならない。基礎科目のICT授業は「実習」がほとんどできない状態だった。そうしたなかで小塚さんは、「実用性が特に高いパソコンスキルだけでも習得させてあげたい」と希望。そのきっかけづくりとして着想したのが、複数の職業訓練校の間でスキルを競う大会の開催だ。

小塚さんはこの構想を、活動がパソコンに関連している隊員で構成する「エレクトロニクス分科会」で紹介し、共同開催を持ちかける。その際に、大会の具体的な内容のアイデアとしてメンバーから挙がったのが、「インターネットの検索スキルを競う」というものだった。このスキルがあれば、自分の仕事に関してわからないことが出てきたときに、ある程度自力で解決できるようになる。

職業訓練校のどのコースの生徒にとっても卒業後に重宝するスキルだということ、早速、実現に向けて運営に関するおまかな役割分担を行った。幹事となっ

たのが、「インターネットの検索スキルを競う」というものだった。このスキルがあれば、自分の仕事に関してわからないことが出てきたときに、ある程度自力で解決できるようになる。

職業訓練校のどのコースの生徒にとっても卒業後に重宝するスキルだということ、早速、実現に向けて運営に関するおまかな役割分担を行った。幹事となっ

たのが、「インターネットの検索スキルを競う」というものだった。このスキルがあれば、自分の仕事に関してわからないことが出てきたときに、ある程度自力で解決できるようになる。

職業訓練校のどのコースの生徒にとっても卒業後に重宝するスキルだということ、早速、実現に向けて運営に関するおまかな役割分担を行った。幹事となっ

たのは小塚さんだ。そうして大会の準備をスタートさせようとした矢先、予期せぬ事態が発生する。自身の健康上の理由で一時期帰国しなければならなくなった。任期終了まで残り10カ月という時期だった。医師には、ガーナに戻るの半年後だと告げられた。
■ 配属校のICT部門に現地教員が配置されたとの知らせを受けたのは、一時帰国して1カ月ほど経ったころだ。ついに「現地教員に技術を伝える活動」に取り組める可能性が生まれた。しかし、ガーナに戻る時点で任期の残りはわずか4カ月。新任の教員と互いの考えを理解し合う活動は中途半端な結果に終わってしまうだろう。そう考えた小塚さんは、彼との共同作業は断念すべきだと判断。代わりに、日々の授業や検索大会に専念し、それらを確実にやり遂げようとした。
■ 学校間のネットワークも誕生
検索大会の準備は、小塚さんが幹事だったことから、一時帰国の間は停滞。予定どおり半年でガーナに戻ることができた小塚さんは、すぐさま準備を再開する。大会の概要は次のように企画した。
■ インターネット環境が良いことから、会場は小塚さんの配属校とする。



CASE 3

プラスαの活動①

こづかちあきこ
小塚千秋さん
(ガーナ・PCインストラクター・2016年度2次隊)の事例

小塚さん基礎情報

PROFILE

1988年生まれ、福岡県出身。大学卒業後、IT系企業に数年間、エンジニア職で勤務。2016年9月、協力隊員としてガーナに赴任。18年9月に帰国。

活動概要

ウイネバ職業訓練校(セントラル州)に配属され、主に以下の活動に従事。

- 授業の実施 (ICTコースの専攻科目、全コースの基礎科目)
- 複数の職業訓練校を対象とした「検索大会」の開催 (分科会による活動)

ICT部門の教員として職業訓練校に配属された小塚さん。任期の後半に入ったとたん、一時帰国を余儀なくされるといふ不測の事態が発生したが、任期終盤は活動を絞り込み、配属校を超えたイベントを実現させた。



1 中村さんが任期終盤に村落部の小学校で行った健康教育で、食品が描かれたカードを5大栄養素に分類するアクティビティに取り組む児童たち
 2 中村さん（前列左から4人目）とBさん（右端）が行った健康教育の対象児童たち。担任教員（前列左から3人目）にもフォローに入ってもらった
 3 食品を5大栄養素に分類するアクティビティで使った中村さん自作の教材
 4 配属先で患者の病状をチェックする中村さん
 5 Bさんの発案によって理学療法室で流すようになった動画を手本に、治療の待ち時間に体操に取り組む患者たち

ると、回復が顕著な例も出てきた。「そろそろAさんが質問してくれるだろう」。そんな期待を持ち始めた矢先、Aさんが産休に入ることを知らされる。着任の約半年後だった。

後任として別の女性看護師（以下、Bさん）が異動してきたが、すぐさま、理学療法士の研修を受けるためにしばらく職場を離れることとなった。キルギスでは、技術伝達の相手がない協力隊員は医療行為を行うことが認められていない。そのため、中村さんは治療を行うことすらできない状態となってしまった。「今は『現場』のことを知るべき時期だ」。そう考え、「ペンキ塗りの手伝い」

など、任せてもらえることなら何でもこなし、理学療法部門以外の同僚たちとの関係を深めていった。

配属先外での協働も実現

Bさんが復帰し、中村さんが再び治療に携わることができるようになったのは、すでに任期も半ば近くとなったころ。その時期、「活動らしい活動ができていない」という焦りを見失うことは避けたい。そこで中村さんは、「自分が本当にやりたいのはどのような活動か?」と自問。「現地の人に潜在する『主体的に学ぶ力』を引き出すこと」という、赴任時に立てた活動理念をあらためて思い起こし、これを堅守しようと心に決めたのだ。

そうして中村さんは、Bさんに対しても「自分から指導することはしない」という方針を貫いた。Bさんが「どのように治療をしているの?」と尋ねてくれるようになったのは、任期の残り半年ほどとなった時期だ。中村さんが治療した患者に「歩けるようになる」などの治療効果が出たときに、「エリはどういう治療をしたの?」と聞いてきた。

このタイミングに、中村さんは理学療法部門専用の簡易カルテのフォーマットをつくり、Bさんに導入を提案した。実施した治療の方法とその効果を記録していくものだ。「こ

れは使いやすい」とBさんも賛同してくれたことから、すぐさま活用が定着。この簡易カルテにより、「効果の評価と治療方法の見直しを繰り返す」という、理学療法法の「骨格」の実践が容易になり、それがBさんの治療でも習慣化したのだ。

以上のように「主体的に学ぶ力」を発揮するようになったBさんは、中村さんが任期の最終盤に始めた配属先外での活動にも参加し、未経験だったことに挑戦してくれた。村落部の学校で健康教育を行う活動だ。

キルギスの学校には保健の授業がなく、子どもたちは体や栄養に関する知識を持たない。中村さんは以前、そんな話を小学校に配属されている隊員から聞き、学校での健康教育に取り組みたいという思いを抱くようになっていた。その実践を後押ししたのは、日本から遊びに来た友人の「田舎に連れて行って」というリクエスト。せっかくなら、行った先でプラスαの活動をしようと思っただけなのに、この活動だった。

実現したのは、任期の残りが3カ月ほどとなった時期。対象は、協力隊員が配属されている小学校の児童たちだ。内容は、『歯磨きの歌』の合唱や、食品が描かれたカードを5大栄養素に分類するゲームなど。

当初はその一回だけとするつもりだったが、村落部で活動するほかの隊員たちからも、それぞれの配属先での実施を求める声が上がった。中

村さんの上司も活動の意義に賛同し、出張扱いを認めてくれたことから、任期終了までに計8カ所の小学校や幼稚園を回ることに叶った。

Bさんにこの活動の話伝えると、「講師役で参加したい」と希望したことから、2人の協働も実現。中村さんが子どもを対象にした病気の予防に関する講習を担当し、Bさんが教員を対象にした腰痛や肩凝りの予防に関する講習を担当した。Bさんにとって、「講習」を実施するのはこのときが初めて。そこで身に付けたスキルは、中村さんからの最後の置き土産となった。

C

関係を深めていった同僚との配属先外での健康教育が実現

通所リハビリテーション施設で理学療法部門の支援に取り組んだ中村さん。「活動らしい活動ができていない」という焦りとともに任期の折り返しを迎えたが、当初の活動理念をブレずに持ち続けたところ、任期終盤、一気に目指す活動が実現していった。

中村さんが配属されたのは、首都にある通所リハビリテーション施設。その理学療法部門を支援するところが、中村さんに求められていた活動だった。

着任当時、同部門に配属されていた同僚は女性看護師がひとり（以下、Aさん）。キルギスには理学療法士の資格が存在せず、医師や看護師などが理学療法に関する数カ月の研修を受ければ、理学療法に携わることが認められる制度となっていた。Aさんもそうした人材のひとりだった。

「知ること」に徹した任期中半

中村さんの最初の活動は、理学療法士として患者の治療に当たること。中村さんとAさんは別々の患者を担当することとなったが、治療をする場所は同じ部屋。すると、経験があったAさんにもまだ技術面で問題があることが早々に見えてきた。中村さんが特に大きな問題だと考えたのは、効果を評価しないまま、同じ治療方法を続けてしまっている点だ。

効果を評価しては、治療方法の見直しを図る。これを繰り返すことが理学療法法の「骨格」だ。それをAさんに知ってほしいと思ったが、中村さんは「どのように治療をしているの?」という質問を待つてアドバイザーするという方針を立てた。本人が価値を感じ、「学びたい」と思った技術でなければ、情報を提供しても身に付かないと考えたからだ。現地の人に潜在する「主体的に学ぶ力」を引き出すことこそ、中村さんが赴任時に立てた活動理念だった。

そうして中村さんは、まずは自分が担当する患者への治療に専念。す

直しを図る。これを繰り返すことが理学療法法の「骨格」だ。それをAさんに知ってほしいと思ったが、中村さんは「どのように治療をしているの?」という質問を待つてアドバイザーするという方針を立てた。本人が価値を感じ、「学びたい」と思った技術でなければ、情報を提供しても身に付かないと考えたからだ。現地の人に潜在する「主体的に学ぶ力」を引き出すことこそ、中村さんが赴任時に立てた活動理念だった。

そうして中村さんは、まずは自分が担当する患者への治療に専念。す

“任期終盤”の心構え

中村さんの事例から

活動理念を見失わない!

チャンスはいつ訪れるかわからない。自分の活動理念を堅持していれば、たとえチャンス到来が任期終盤であっても、目指す活動を実現することができるだろう。

CASE 4



プラスαの活動②

なみむらえり
 中村恵理さん
 (キルギス・理学療法士・2016年度2次隊)
 の事例

中村さん基礎情報

PROFILE

1988年生まれ、北海道出身。国際医療福祉大学を卒業後、理学療法士の国家資格を取得。急性期総合病院に5年間、理学療法士として勤務した後、2016年10月、協力隊員としてキルギスに赴任。18年10月に帰国。

活動概要

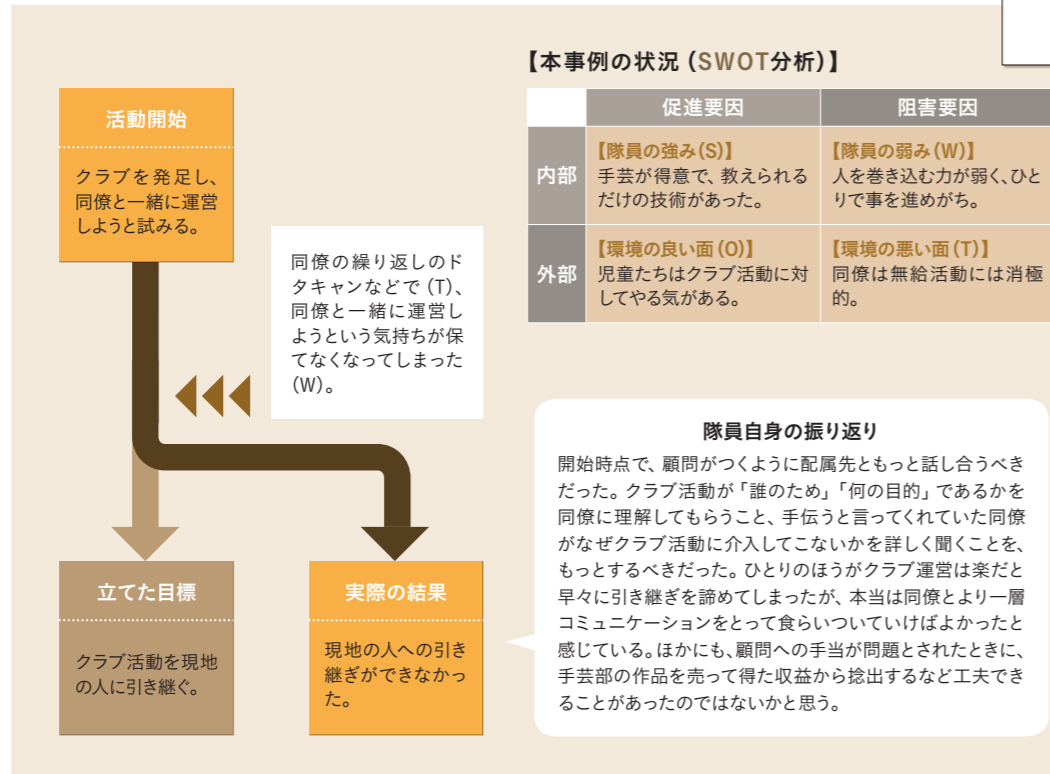
首都ビシュケク市にある市立リハビリテーションセンターに配属され、主に以下の活動に従事。

- 同僚への理学療法技術の伝達
- 理学療法に関する業務改善の支援
- 産科病院での哺乳指導
- 村落部の小学校や幼稚園での健康教育の実施

“失敗”から 学ぶ #169



事例整理



他隊員の分析

達成感を味わえる環境をつくる

虚無感や諦めは、本気で活動に向き合った方のみが得られる感覚だと思います。私も隊員時代に用具不足という壁にぶつかりました。そこで、タームに一度同僚から寄付を集め、校長からも情操教育用の予算をもらうことにしました。ここで私が使った手法は、私も寄付したことは伏せ、同僚の寄付と予算だけで用具を買ったと伝えることです。これが彼らのモチベーションにつながり、最初は1人10円だった同僚の寄付が、100円相当へと上がっていきました。また、同僚には常に感謝を示すよう努めたことで、活動を同僚に引き継ぐことができました。

文＝協力隊経験者

- アフリカ・小学校教育・2015年度派遣
- 取り組んだ活動

体育、図工、音楽の促進を小学校で行う。赴任当初時間割に全くなかったこの科目を、同僚の助けもあり、各クラスに週2回ずつ発足させ、すべての授業を同僚に引き継いだ。また運動会などのイベントも実施した。

現場の声に解決の糸口がある

私は、現地の人が実際に何に困っているのか、どこに必要性や困難を感じているのか、現場の生の声から情報収集をすることを心掛けていました。本音が聞ける信頼関係を築きかけたので、活動後におしゃべりしたり、お茶をしたりして、どんどん輪の中に入っていきました。そこで先生方は児童の学習態度について困っていることを知り、現状を聞いて改善策を提案、問題の解決につながりました。自分がやるのが早いこともあるかもしれませんが、自分が思った解決策よりも、現地の人の言葉の中に解決の糸口があるのかもしれない。

文＝協力隊経験者

- 中南米・小学校教育・2015年度派遣
- 取り組んだ活動

小学校2校にて活動し、算数における児童の学力向上と教師の授業力向上を目指し、主に授業観察後の指導や校内外での研修会の定期実施、研修グループの立ち上げなどを行う。

用具不足を解消する活動を開始したが、 現地の人に引き継げなかった

文＝青木 泉さん(モザンビーク・青少年活動・2016年度2次隊)

配属先の学校は、私の赴任前から体育用具の不足に悩まされていた。歴代の隊員が用具を多々寄付したこともあり、私も赴任直後に配属先からJICAの現地業務費での用具購入を執拗に求められていた。配属先も努力するとの条件をつけ、任期1年目に現地業務費でボールなどの購入に至ったが、配属先の姿勢が変わることはなかった。用具不足の問題を自分たちで対応する考えを持ってはしかなかったため、赴任1年後、私は手芸クラブを発足。児童に裁縫などを教えてボーチャや巾着をつくり、それらを売って得た収益で授業用具を購入する活動を始めた。

最終的には現地の人が手芸クラブを運営できるように、活動開始前に同僚たちに相談し、2、3人から一緒にクラブ運営をする約束を取り付けることができた。しかし、約束した同僚たちはなかなかクラブの活動日に現れず、私ひとりで児童たちと活動する日々が続いた。同僚に来てほしいとお願ひし、約束してくれるものの、ドタキャンなどが繰り返された。そのうち私は同僚に期待しなくなり、来るのか不明な彼らをあてにするより自分ひとりでクラブを運営する方が楽だと感じ

て、巻き込むことを諦めてしまった。

任期が残り5カ月を切った頃から、クラブでつくった作品が売れ始め、収益で授業用具を購入できるようになっていった。参加児童は毎週作品をつくることを楽しんでいて、私の離任後も引き継ぎクラブ活動をしたと言ってくるようになっていた。やはり引き継ぐ人を再度探すうとカウンタートパートに相談したのだが、「給与が発生しない活動には自分も含め、同僚は皆、消極的である」と聞かされた。そこで、手芸クラブの顧問を務める人にも手当をつけてもらえるよう、企画調査員(ボランティア事業)経由で配属先長に提案。しかし、「クラブ顧問の手当を支給するのは教育費で、学校からは何もできない」という回答だった。結局、手当は断念し、クラブを引き継ぐ人も見つからず、任期終了を迎えてしまった。

クラブを存続させられず子どもたちを失望させてしまったし、手芸クラブの活動が用具不足の解消につながっていたのに廃部になってしまった。早くからクラブの引き継ぎを計画して、同僚や配属先をもっと巻き込んで活動を進めるべきだったと、反省が残った。



手芸クラブの児童たちに巾着の作り方を教える青木さん



PROFILE

1990年生まれ、東京都出身。2013年3月成蹊大学文学部現代社会学科を卒業後、中小企業の商社に営業事務として入社。16年9月、協力隊に参加(現職参加)。18年9月、帰国。18年11月より休職していた会社へ復職。

活動概要

モザンビークの小学校にて情操教育支援として主に以下の活動を行う。

- 現地教員とともに体育と音楽の授業運営
- バレーボール部や手芸クラブの活動の運営と支援
- 学校にて事務作業の支援

派遣人数は少ないもの
いぶし銀の活躍をする
職種の事例をピックアップ

#G232

文化財保護

派遣中 ▶ 3人

累計 ▶ 39人

分類 ▶ 人的資源

活動例 ▶ 文化遺産などを持つ博物館の展示改善や広報活動など

類似職種 ▶ 学芸員など

※人数は、青年海外協力隊派遣実績、2019年2月28日現在。



展示改善のためにチームを組んだ2人の同僚と主税さん(中央)。配属先で展示改善の提案をしてから1年の間、幾度となく同僚と展示改善のための会議を開いた

PROFILE

1985年生まれ、鹿児島県出身。2009年、九州大学文学部考古学研究室卒業後、九州大学大学院比較社会文化学府修士課程と博士課程に進学。博士課程在学中の15年7月、協力隊に参加。17年7月、帰国。その後、九州大学総合研究博物館の専門研究員として考古学の研究を続けつつ、18年10月より、福岡県大野城市にある市民ミュージアム「心のふるさと館」で学芸員として勤務中。

活動概要

ホイアン市の博物館にて博物館業務サポートならびに展示内容の充実を目指し、以下の活動を行う。

- 展示内容の現状調査と、それをもとにした改善業務
- 展示パネルや音声ガイドにおける日本語訳の支援
- パンフレットやウェブサイト作成による広報活動
- 教育普及業務の支援 など



話

主税和賀子さん

(ベトナム・2015年度1次隊)

#C106

きのこ栽培

派遣中 ▶ 1人

累計 ▶ 46人

分類 ▶ 農林水産

活動例 ▶ 栽培技術の移転、栽培環境の改善、栽培試験や研究など

類似職種 ▶ 林業・森林保全

※人数は、青年海外協力隊派遣実績、2019年2月28日現在。



菌床工場で活動する三田さん。奥に写っているのが、菌床の原料となるおが粉。この菌床を使用し、任地で栽培した。もしくは栽培を試みたキノコは、日本のスーパーでもよく見られるシイタケ、エリンギ、エノキタケ、ナメコ、ブナシメジのほか、クロアワビタケ、ヒジリタケ、ネツタイカワキタケ、レイシなど約20種に及ぶ

PROFILE

1986年生まれ、埼玉県出身。大学では森林科学を専攻、卒業後は一般企業でキノコの品種改良・栽培に関する業務に従事、4年半勤務。2016年1月、協力隊に参加し、マレーシアに派遣される。19年1月帰国。同年3月、元配属先の会社に就職。

活動概要

ボルネオ島サバ州、地域開発公社ボルネオマッシュルームにて、農家支援のため、以下の活動を行う。

- 現地公社の菌床工場を改善
- キノコ栽培農家の巡回、講習会の実施
- 各種キノコの栽培試験
- 菌床の新規原料に関する研究 など



話

三田岳さん

(マレーシア・2015年度3次隊)

Q メインの活動は？

農家の収入向上を目的とする地域開発公社ボルネオマッシュルームに派遣され、菌床工場の改善や、キノコ栽培の普及活動などに取り組みました。

現地には、菌床工場の雑菌汚染率が非常に高いという問題点がありました。赴任当初は3割を超える菌床を廃棄しており、これが配属先の財政を圧迫。このままでは農家に販売する菌床の値段も上げざるをえず、農家の栽培意欲を削いでしまう……そこで、この問題に配属先職員とともに取り組み、さまざまな対策を行いました。

Q 活動の最大の困難は？

私は収量の上がる日本式の栽培法を普及させたくて、配属先の職員に教えたり、農家に対して講習会を開いたりしました。実際現地で試験栽培を行うと、マレーシア式の栽培法と比較して1.5倍以上の収量があったため、私は必ず普及できると考えていました。

Q メインの活動は？

ベトナムの世界遺産のひとつであるホイアン市の文化遺産保存管理センターで活動しました。主な活動は展示内容の改善。現地で1年間、同僚たちの展示業務をサポートして気づいたのは、展示のコンセプトを十分に検討することなくデザイン専門の方に展示設計を依頼し、展示業務を行う、というやり方をとっているということ。これによって観光客に内容がわかりづらいため、あとからの展示修正が多く、時間もお金も余計にかかっていました。

この問題点の解決のため、まず配属先で、展示の現状とコンセプトづくりの重要性をプレゼン。その結果、配属先長から、コンセプトを吟味した方法で展示改善をするようにと指示がありました。同僚2人と自分でチームを組み、ひとつの展示室を対象に、展示改善を開始。何度も会議を開き、コンセプトと展示設計を吟味し、その結果を同僚に発表してもらい、上司からの許可を得て実際の改善作業を行いました。費用のからない改善と費用のかかる改善の2段階計画で進めましたが、結論として2段階の途中で任期満了となり、残りは同僚たちに託しました。

Q 活動の最大の困難は？

会議を開く約束をしても、急な別の業務でキャンセルされるなど、予定通り進むことがほばないということでした。

しかし、多くの農家が興味を持ってくれたにもかかわらず、普及はほとんど進まず、実質失敗してしまいました。

Q その失敗を活動にどう生かしましたか？

私はなぜうまくいかなかったのか、日本式の栽培に取り組んでくれないの理由を聞いて回りました。すると、いくつかの地域では頻りに断水が起るため、水を大量に使う日本式の栽培法は合わないことが判明。また別の地域では、兼業農家のため手間のかかる日本式の栽培は難しい、という意見もありました。以降、私は日本式の栽培を農家に推奨するのではなく、農家から声の上だった問題点の解決を中心に活動を行うようになりました。

Q 同職種の後輩隊員にメッセージをお願いします。

キノコ栽培は、結果が出るまで時間を要するものが多く、日本とは違った環境・設備で栽培を行うため、思ったような結果が得られないことがあります。しかし、焦らず粘り強く活動していきましょう。そして注意深く状況を観察し、任地に最も合った方法を考えることが大事だと思います。道具や試薬、機械などが不足しがちな開発途上国ですが、気候や価格では日本より有利な場合もあります。創造力をフル活用して、アイデアをひねり出しましょう。

Q 試みた解決策は？

改善業務に関する会議や改善作業を行う日程について、事前に何度も何度も同僚たちに念を押して口頭とメールでリマインドしました。さらに予定が急に変更になった際には、必ず代わりの日程を決めました。同僚たちの業務や配属先の日程に関する情報は、配属先の同僚や上司、清掃業務の方などいろいろな方と常に話をすることで収集しました。

Q 同職種の後輩隊員にメッセージをお願いします。

私は博物館業務でしたが、ひとつに文化財保護といっても、多様な種類の業務があります。文化財は現地の人が自らの国や文化に誇りをもつうえで、非常に重要なものです。それらの保護や活用に関する業務に現地の人と一緒に携わることができるとこの職種は、自分にとっても非常に意義あるものでした。やったことがすぐ目の前で効果として表れにくい活動ですが、現地の人と関係性をつくって、仲間になって、一緒に活動していただけたらと思います。



before
アパレル企業 社員

after
ヨガインストラクター・
ウェブショップ経営者



after

福岡県・博多にある喫茶店「マスカル珈琲」に陳列される、松尾さんが運営するウェブショップ「NATOTELA」の商品（中央にある、チテンジのミニハンカチタオル・くるみボタンのヘアゴムとピアスなど）。マスカル珈琲のオーナーも協力隊経験者で、同店ではオーナーの派遣国エチオピアの品々も見ることができる
マスカル珈琲の住所▶福岡県福岡市博多区博多駅南4-16-14 1F

松尾さんのプロフィール

2014 2011 1999 1981

長崎県出身。
4月、香蘭ファッションデザイン専門学校卒業後、アパレル企業へ就職。

3月、青年海外協力隊に参加①
ザンビアの北部にあるチフワニ職業訓練センターで、20〜40代の地域住民に婦人・子ども服の縫製技術を指導した。

3月、帰国。

10月、ヨガの専門学校に通い、その後、ヨガインストラクターとして働き始める。
ウェブショップ「NATOTELA」の運営を開始②

NATOTELA
アフリカの布チテンゲやカンガを使ってつくるハンドメイド雑貨の店。NATOTELA（ナトテラ）はザンビアの現地語で「ありがとう」という意味。松尾さんが1からデザインを手がけ、ひとつひとつNATOTELA（ありがとう）の気持ちをこめてつくった雑貨を、以下のウェブサイト販売している。
NATOTELAのウェブサイト
▶http://mattibou.thebase.in/

選択の理由

活動先に行く途中、毎日同じ人に会った。路上で暮らし、道になっているマンゴーを食べたり、教会でご飯をもらったりしていたようで、活動中の3年間その人は変わらずそこにいた。「人は自由に生きていけるのではないかと感じ、好きなことをして生きていく道を選ぶ。

選択の理由

海外への憧れはあったがツテがない。そこで、自力では行きづらい距離にある国でもバックアップを受けられ、健康面や安全面でもサポートを得られる協力隊に参加することを決めた。

協力隊に参加

ヨガインストラクターに

服飾の専門学校を卒業して10年間、洋服をつくり続けた。その技術が通じるのか試そうと、協力隊に参加。派遣国のザンビアで知ったのは、「自由な生き方」だった。帰国後は、自身の技術とザンビアの布を生かした雑貨店をウェブ上で経営し、ヨガのインストラクターに転身。好きなことをして暮らす、そんな生き方を実践している。

働いて獲得した技術を生かしたい

料理が好きだった松尾さんは高校の家政科に進学し、調理とともに服飾を学んだ。「自分の身長に合う既製服が少なく、つくった方が早い」と気づき、その後、服づくりの楽しさにのめり込んだ。卒業後、服飾専門学校に通い、アパレル企業に就職。「話す間もなく、ひたすらミシンで縫い続けていた」というが、その工程は松尾さんの性に合っていた。たまに同僚と飲んで忙しいと愚痴を言い、何となく海外に憧れて英会話を習い、休みの日は好きなヨガに通う日々。そのうち仕事では副主任になり、社外でも教える立場になっていった。ひと通りの服づくりを経験し、同じ仕事にちょっとした「飽き」も



ザンビアの職業訓練センターの生徒と話し合う松尾さん。「1日中会議の日もあった」という。作業のことだけでなく生徒同士のトラブル、家庭の愚痴など何でも聞いた

受け入れたら、次に進める

松尾佳世子さん
ザンビア・服飾・2010年度4次隊

帰国後、松尾さんは「好きなことをやった結果、お金を得る生き方をしたい」と考えた。手元には趣味で買い集めたアフリカの布がある。ザンビアとつながり続けるためにも、その布で雑貨をつくり、販売するウェブショップを開始。同時に、派遣前から好きだったヨガIR（インストラクター）になるうと考へ、学校に通った。

IRになって4年、現在は、友人のヨガ教室やスポーツジム、公民館で週に6日、ヨガを教えている。IRは「相手がいて成り立つ仕事」。知識と同じくらい人に好かれるのも大事なことだ。人に助けてもらうことで何かを達成した協力隊経験があるから、人とかかわって生きていく大切さを実感できる。「レッスン後、参加者様の表情が明るくなり、少しずつ健康になっていく姿を見られるのが楽しい」と松尾さんはいふ。また、ヨガの知識を深めるため、体の構造を知ろうと「解剖学」も勉強中だ。体の状態と心の因果関係を知ることが面白く、空いた時間を勉強に費やしているうち、今ではヨガ教室のひとつで講義を持つほどになった。

そして、松尾さんにはもうひとつやりたことがある。それはザンビアの元同僚とウェブショップの一部を一緒に運営すること。元同僚自身も現地に店を持つ事業家で、「いつか一緒に」と派遣中から考えていた。先日、隊員を通じて、元同僚からウェブレターが届いた。「いつ帰ってくるの!!」、懐かしい顔と声。帰国して5年、元同僚に会いに行く方法を探し始めたところだ。



理想 現実

帰国後のとを語り合う

OB・OG 匿名 座談会

第④回 小学校教育隊員篇

Cさん(女性)
【派遣前】公立中学校教諭(英語科)
【協力隊】▶退職参加
▶小学校教育・中南米・2015年度派遣
▶算数教育を支援
【帰国後】市町村教育委員会職員

Bさん(男性)
【派遣前】公立小学校教諭
【協力隊】▶現職参加
▶小学校教育・大洋州・2015年度派遣
▶実技教科を支援
【帰国後】公立小学校教諭

Aさん(女性)
【派遣前】公立小学校教諭
【協力隊】▶現職参加
▶小学校教育・アフリカ・2015年度派遣
▶実技教科を支援
【帰国後】公立小学校教諭

A 私は小学校教諭として2校に勤務して2017年の3月です。復職後、17年度は低学年の担任を持ったのですが、18年度は担任を持たず、研究主任の専従となっております。

B 私もAさんと同じく、小学校教諭として2校に勤務してから協力隊に現職参加し、17年の3月に帰国、復職しています。17年度は高学年の担任を持ち、18年度は中学年の担任を持っています。

C 私はおふたりと異なり、派遣前は公立中学校で英語科教員を務めていました。協力隊は退職しての参加です。帰国は17年で、18年の4月から市町村の教育委員会の職員として、外国語教育や国際理解教育の支援を担当しています。

帰国後に感じた違和感

C 私は今の仕事で学校を巡回することが多いのですが、その中で、協力隊を経験する前にはなかった違和感を感じることがあります。そのひとつが、「規律指導が厳しすぎる」というものです。授業中に教室から出ていってしまう派遣国の子どもたちを見ているから、席に座って教員の話も聞いている日本の子どもたちは、それだけで十分だと思うのですが、「座る姿勢」などについてまで指導されたりする。

B 私の派遣国の学校と比べても、日本の小学校は厳しいなと思います。私の任地は食べるものが自然に育ち、働かなくても飢える心配などないような環境でした。そのため、学校にも保護者にも、「社会に出て職を得る」というために、子どもに規律を身に付けさせる」といった意識は薄いようでした。

A 私の派遣国では教員の体罰がありました。だから、日本の小学校の規律指導がそこまで過剰だとは思いません。ただ、教員が管理職の目を気にするあまり、不必要な規律指導をしてしまっている例はあると思っています。例えば、授業中に誰かが発表している最中に、隣の子と話をしたり、何かを書いたりすることを一律に禁止するような指導です。発表の内容を真剣に考えているからこそ、それについて隣の子と話したり、メモしたりしている可能性もあるからです。

C 「行儀の良さ」を必要以上に求める教育からは、子どもの「創造性」を引き出すことはできないのではないかと。それが私の懸念です。グローバルな資質を育てていくことが学校教育でも求められている時代に、やはりそれはひとつの問題ではないかと。

A 「子どもを型にはめすぎる」という点は、私も日本の小学校の問題だろうと感じています。そうした意味からも、協力隊を経験した教員が、「ほかの国はこんななんだよ。小さく固まらなくても良いんだよ」と子どもたちに伝えることは重要なだろうと思います。ただ、私が復職後に担任を持ったのは低学年で、「海外」というものを理解させるのはまだ難しい年代だったため、実践はできませんでした。

B 私は復職後、「行儀良く話を聞く」というのは正反対の授業方法を試みたことがあります。「先生は教えないから、自分で考えてこらん」と言っていて、教室を自由に立ち歩き、子ども同士で話をさせるといふものがあります。しかし、それを学校教育のなかで続けるのは難しい。学校はどのクラスも秩序が一律に保たれていることが求められており、私ひとり自分の思いだけでほかの教員と違うやり方を

することはできないからです。
C 子どもたちに「海外」のことを伝えるのを困難にしているもうひとつの要因として、「教員の多忙さ」も挙げられると思います。私が今の仕事で国際理解教育の新しい取り組みを学校現場に提案する際、常に配慮しなければならぬのが、教員たちからの「仕事が増える」という反発なのです。
A 授業が終わった後も、部活動や教材研究、ノートチェックがあり、校外で発生する子ども同士のトラブルも学校に持ち込まれますから、小学校の教員は本当に忙しいです。
B 今、「教員の働き方」が社会的な問題とされてはいますが、「道徳教育」など、小学校の教員が対応しなければならぬ新たな授業も次々に出てきていますからね。確かに、同僚教員に「国際理解教育の話ですが……」と持ちかけても、「それどころではない」という反応です。派遣国の学校を見てきている協力隊経験者は、日本の教員の働き方に対する違和感はいっそう強いでしょう。だからこそ、この問題を解決するために自分に何かできることはないかと、常々思いをめぐらせています。

経験を生かすのは自分次第

A 私の勤務校では、「教員は、週に1日は午後7時までに学校を出る」というルールが設定されていますが、徹底されてはいません。そこで私は今、研究主任として、教員の負担を減らす策の提案をしようと準備しています。例えば、教員が毎週出している「お便り」を、学校全体で簡素化しようといった提案です。

B 教員の働き方の問題は、結局、校長がどういうルールを設定するかではなく、教

員ひとりひとりの意識がどう変わっていくかにかかっているのだと思います。その働きかけをするチャンスは、「校長」や「研究主任」などの役職を持たない私のような一般の教員にも、実はある。最近になってようやく、そう思うようになってきました。例えば、日々の職員会議あるいは毎年度末に行われる翌年度の年間計画の話し合いなどです。そこで私は、職員会議の中で「学校行事の規模を小さくしましょう」という提案を試みました。その準備が、教員の業務量を増やしていると感じていたからです。しかし、「前例を変えること」に対する同僚教員たちの抵抗感は予想以上に大きく、同意を得るのは難しかったです。

C 協力隊経験によって感じるようになってきた「違和感」を、「協力隊」や「海外」ということなのだろうと思います。例えば、私は協力隊を経験したことで、「何もなければ、できるだけ定時に仕事を切り上げよう」という意識を強く持つことができるようになりました。派遣中、みんながそれを実践しているような職場にいたからです。でも、今の職場には海外経験をされている方はほとんどいないので、「なんとなく馴染めない」という感覚がまだに消えません。

B 違和感を共有してもらえたら周囲にいいこと、どうしても「改善の提案をしていこう」という意欲が薄れがちになってしまいますよね。それが私の今の悩みです。

A 協力隊経験を仕事の中で生かすかどうか、その意欲を持ち続けられるかどうかは、結局、協力隊経験者自身の行動次第なのではないでしょうか。私は最近になって、そう思うようになってきました。私は復職した当初、何事もなかったかのよう2年前の日常に戻っ

てしまった感覚がありました。日本での仕事と協力隊経験とを結びつける手がかりが、まったくつかめなかったからです。しかし、日本の生活に慣れてくると、次第に「このままでは協力隊経験が無駄になってしまう」という危機感が強くなっていきました。そこで、まずは仕事以外の場で協力隊経験を生かしてみようと、協力隊仲間と一緒にアフリカの子どもたちを支援する活動を始めました。それにより、「協力隊経験」が自分の中で薄れていくのを食い止めることができました。そうしてようやく最近になって、さきほどお話ししたように、研究主任としての仕事のなかで、協力隊を経験したからこそ持っている視点での提案をしていこうと発想できるようになったのです。

B 「協力隊経験を生かすかどうかは自分次第」という言葉は、本当にそうだと思いますし、「前例を変えること」に対する同僚たちの抵抗感をなくすための働きかけを、しつとく続けていこうという気持ちになりました。

C 私は、さきほどお話しした「職場になんとなく馴染めない」という悩みについて、看護師の友人に相談したことがあります。そのときに教えてもらったのですが、海外から戻ったときに感じる「なんとなく馴染めない」という感覚は、「リバース・カルチャーショック」と言われるものであり、そこから抜け出すのに有効な手段のひとつは、似た経験を共有する人とかく話をすることだそうなんです。それを聞いて、私もAさんのように努めて協力隊仲間との交流をするようになりました。そんなふうにして、「なんとなく馴染めない」という感覚を消化しながら、私も「協力隊経験を生かすかどうかは自分次第」という言葉を支えに、協力隊経験を生かした国際理解教育の企画などに挑戦していきたいと思っています。

* 研究主任…校務分掌のうち、研究授業の計画・実施などを担当する「研究部」の責任者

知ったク情報



写真を楽しむ④

ナビゲーター = 森 佑一さん
(ヨルダン・環境教育・2014年度3次隊)、
フォトジャーナリスト

星空を撮影してみよう!

派遣国の人里離れた場所に行くと、建物の光や街灯などがなく夜は真っ暗。空を見上げると無数の星が輝ききれいな夜空を眺める機会もあるでしょう。ただ眺めるだけでなく、そんな夜空を写真に収めたいと思う人も多いはず。そこで今回、三脚なしでも簡単に星空を撮影できる方法をご紹介します。

一般的な一眼レフカメラであれば、マニュアル(M)操作機能が付いているかと思えます。これはカメラのシャッター速度(Tv)や絞り(Av)、ISO感度といったものを自分の好みに設定できる機能。これを使って星空を撮影してみましょう。

①レンズはズームしない

使っているレンズがズームレンズであれば、撮影画角が一番広くなり、絞り(③参照)の値が一番小さくなるよう、ズームせずに撮影します。

②ピントは無限遠(∞)に

夜空は暗くてオートフォーカス(AF)が効きにくいので、ピント合わせはマニュアル操作で行います。レンズにピント調節リングが付いているので、それを手で回して無限遠(∞)に、∞の記載がなければファインダー越しに目視で合わせます。

③絞り(Av)を一番小さい値に

レンズごとに記載されている絞り値の数値を一番小さくします。例えば、f3.5-f5.6であればf3.5にします。

④シャッター速度(Tv)とISO感度の調整

シャッター速度とISO感度を決めます。シャッター速度を30秒にして、ISO感度はひとまず400くらいにします。

⑤タイマーを使って撮影

手持ちの撮影だと手ブレしてしまうので、撮りたい方向に向かって地面にカメラを置いてタイマーで撮影します。このときオートフォーカス機能は切りにして、シャッターボタンを押したときにピントが動かない様におきましょう。

撮影結果はどうだったでしょうか? 暗くて星がうまく写っていない場合は、ISO感度を上げて再度撮影してみましょう。カメラやレンズの性能、環境によって星空をうまく写せる設定は違って来るかと思えます。いろいろ試行錯誤してがんばってくださいね。任地の写真ライフに役立てば幸いです。📌

知ったク情報



アンガーマネジメント①

ナビゲーター = 北澤彩子さん
(旧姓・大和田/ケニア・理数科教師・1997年度2次隊)、
一般社団法人日本アンガーマネジメント協会ファシリテーター

怒りとは?

開発途上国で活動していると、異文化のなかで「理解できない」ことがあったり、理不尽な状況に置かれたりして、怒りを覚えることも多くあるのではないのでしょうか。私自身も、電気も水道もない任地に赴任した際には、周囲になかなかじめず苦労しました。感情が爆発して、ひとりぼっちな気分になり、そして後悔……。その当時、「アンガーマネジメント」を知っていたら、もっと違う形で感情を表現できていたのでは、と思っています。

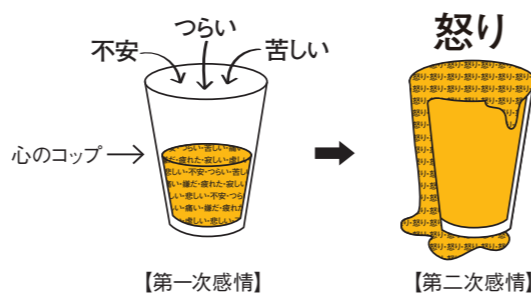
「アンガーマネジメント」とは、怒りのメカニズムを理解し、トレーニングによりコントロールする技術を身に付けることです。怒りを抑え込むのではなく、うまく表現できるようになる、ということを目指しています。

実は、「怒り」という感情自体は悪者ではありません。動物に本来備わっている、生きていくうえで必要な感情のひとつなのです。怒りが問題となるのは、その表現方法にあります。怒りで後悔をしない、怒ったとしても上手に伝えられるようになりますよ!

怒りは第二次感情

まずは、怒りの感情が生まれる仕組みを考えてみましょう。不安、つらい、苦しいといった一般的に言うところのネガティブな感情を第一次感情と呼びます。そういった第一次感情が心のコップにどんどん溜まっていき、それがあふれたときに、怒りの感情となって表れるのです。途上国での生活は慣れないことだらけで、第一次感情が溜まりやすいと言えます。怒りを感じたときには、その背景にある第一次感情にも目を向けてあげて、冷静に自己を分析できるようになりましょう。

今回は怒りのコントロールに有用な暗号をお伝えします! 📌



活動に役立つアイデア



アイスブレイクの手法②

ナビゲーター = 菊地格夫さん(コスタリカ・気象学・1999年度3次隊)
元JICA専門家(参加型保護区管理)、NGO RASICA代表

言葉を話さなくてもできるアイスブレイク(IB)

今号では、言葉を話さなくてもできるアイスブレイク (IB) を紹介します。このIBは、参加者同士での言語による表現や説明などが不要です。そのため母国語が異なる多数の国からの参加者、複雑な表現を理解するのが難しい低学年児童や幼稚園児、識字率や進学率の低い地域の住民や農民などで構成される、またはそれらの人々が混在するワークショップ (WS) の場合に有効です。

アイスブレイク (IB) の基礎情報

IBの目的: 初対面同士の参加者の不安や緊張を和らげ、発言や対話をしやすい雰囲気をつくりあげること。WSの始まりなどで使用する。

IBの基本ルール: WSを進行するファシリテーター (FT) は、「否定しない」「コメントは常に前向き」「なるべく全員にかかわる」。また、FTは、対象人数やスタイル、開催時間によってIBの構成を柔軟に変えるほか、男女が偏らないように考慮する。

①無言のグループ分け

このIBは、WS中に言語を使わず、グループ分けをすることができます。動きがあり楽しみながら、比較的大人数を数個のグループに分けることが可能です。

無言のグループ分け

●所要時間: 20人で5~10分
●人数: 何人でも可

- ①参加者に言葉を発してはいけないが、ジェスチャーの使用は可能であることを伝えます。
- ②これから言う順番に無言で1列に並ぶように、と参加者に伝えます。
- ③例A「自宅がWS開催地から近い順に並ぶ」(先頭がここ、つまりWS開催場所から一番近い所に住んでいると思う人、最後尾がその逆で最も遠い所だと思ふ人)。
例B「誕生日順に並ぶ」(先頭が1月1日、最後尾が12月31日)。
- ④並び終わったら、参加者に先頭から順番に聞いていき、順が合っているかを確認します。
- ⑤グループを2つにしたい場合は、先頭から後ろへ順に「1、2、1、2…」(先頭の人「1」、2番目の人「2」、3番目の人「1」、4番目の人「2」…)と声に発するように伝えます。3つにしたい場合は「1、2、3、1、2、3…」。
- ⑥1と声に発した人はこちら、2と発した人はあちら、とグループごとに集まってもらうよう指示します。

②ジェスチャー伝達ゲーム

このIBは、WS中に言語を使わないため、さまざまな国の人が混ざってもできるのが特徴です。幼稚園児くらいの年齢から年配の方まで、比較的幅広い年齢層で大いに笑うことが可能なIBです。

ジェスチャー伝達ゲーム

●所要時間: 15~20分
●人数: 10人~(1グループ5~20人が2グループ以上)
●用意する物: 絵や写真を10枚程度

【始める前に】 用意する物は、動物、静物の絵や写真がよいです。例えば、ゴリラ、ニワトリ、バナナ、パソコン、ピアノなど表現が簡単な物とワニ、ヤカン、扇風機など難しい物を2種類用意しましょう。

- ①参加者を2つ以上のグループに分け、それぞれ1列に並んでもらいます。
 - ②1列ずつゲームをすることを伝え、最初に行うグループ1列だけを立たせませす。ほかの列は座って見るように指示します。言葉を発してはいけないゲームであることを伝えます。
 - ③先頭の参加者だけFT側を向かせ、残りの列の参加者は後ろを向くように指示し、「これから先頭の人にだけ絵を見せませす。絵を見たらそれが何であったのかをジェスチャーですぐ後ろの人だけに伝えてください。最後まで伝えたら答え合わせをします」と伝えます。見ている参加者に、笑ってもいい言葉が発してはいけないことを再度確認します。
 - ④先頭の参加者と横で座って見ている参加者へのみ、10秒程度絵を見せてから、ジェスチャーでの伝言をスタートします。
 - ⑤最後まで伝えたら、答え合わせをして、どこまで伝わっていたかを確認します。
 - ⑥終わったらその列は座ってもらい、次の列を立たせ別の絵で行います。
- 【学び】** 1人が伝達する時間を5秒程度に限定してFTが管理すると、伝達時間に制限を設けなかった場合より伝わりやすくなります。そのことから相手に何かを伝えるには、たくさんのさまざまな情報よりも、少ない量のシンプルで根源的な情報の方が良いことがわかります。

③エアボクシング

このIBは、教室などでの講義型のWSの途中に行うことで、眠気を取り、気分をリフレッシュすることができるのが特徴です。昼食後のWSなどは、開始1時間後くらいに行うと有効です。

エアボクシング

●所要時間: 3分
●人数: 何人でも可

- ①「少し疲れたようなので、これから皆さんにボクシングをしてリフレッシュしてもらいます」と伝えます。
- ②参加者に立ってもらい、一旦大きく伸びをしてもらいます。次に腕を軽く回してもらうよう伝えます。
- ③参加者と向かい合って「私が右、と言ったら右ストレートでパンチを、左と言ったら左ストレートでパンチを、アッパーと言ったら下から上に向かってパンチを打ってください」と伝えます。実際に胸の高さで腕を前に突き出してパンチする仕方を教えます。
- ④「それでは始めてみましょう」と声をかけ最初は、「右、左、右、左、アッパー」と1秒ごとに5動作をゆっくり行います。次に「もう少し早くしてみましょう」と声をかけ、その次はテンポをどんどん上げていき、最後は早い連打になるように、15動作程度連続で行います。最後の7~8動作は右左の素早い連続ストレートで、最後はアッパー!で終わると盛り上がりませす。

防犯対策

—こんなときどうする?—

長期留守中の空巣被害

年末年始に自宅を留守にしていたら、

長期休暇中、地方の任地から首都に行きドミトリーに宿泊し、首都配属の仲間の隊員と会ったり、買い出しをしたりしてすごしていた。任地の自宅の玄関、窓には鍵をかけていた。

空巣に入られた。

休暇を終えて帰宅すると、窓ガラスとバーグラマー*が壊され、家が荒らされていた。被害は現金約500ドルと腕時計、電子機器類。居間のソファに毛布とシーツがあり、犯人が寝た形跡があった。 *バーグラマー…防犯用格子

解説

犯人がソファで寝ていた形跡があり、犯人は隊員が長期不在となることを把握した上で犯行に及んだ可能性が高いです。長期不在となることを近所や配属先の複数のスタッフ等に伝え、それが意図的でなくとも何かの拍子に犯人にも知られる可能性は排除できません。たとえ警備員であっても長期不在予定を知らせることは避けるべきです。また、留守宅に多額の現金や貴重品を置いておくことも避けましょう。本事例は年末年始休暇ですが、任国外旅行や一時帰国期間の長期不在でも同様の危険性があることを念頭におきましょう。

ワンポイント対策

長期不在を不特定多数に知られないように、不在となることは必要最小限の信頼できる者に限定しましょう。不在時には貴重品はスーツケース等に収納・施錠し、ケース自体をチェーンロック等で移動できないものにしっかり固定しておきましょう。



いつ? どこ?

隊員関連イベント情報

JICAやその関連団体が主催・共催・後援などをするJICA海外協力隊関連のイベントをご紹介します。

4月20,21日 来て、見て、触れ合って、協力隊の世界 東京

協力隊まつり2019



2018年の出展ブースの様子。2018年の協力隊まつりには、2280人が来場し、約40団体が参加。2019年も約40団体が参加する予定だ

協力隊のOB・OG会や関連団体が集まり、世界各国での活動内容や、帰国後の活動を紹介する「協力隊まつり」。4月20日はパラリンピック支援事業に携わる山口真緒さん(ウガンダ・小学校教育・2015年度1次隊)がセミナーを開催。21日は元海上保安庁長官の中島敏さん(Bangladesh・航海術・1982年度3次隊)によるキャリアセミナーや、協力隊の映画『クロスロード』の上映会などが行われます。

- いつ? 4月20日(土)、21日(日) 10:00~17:00
- どこ? JICA市ヶ谷ビル(東京都)
- 連絡先 協力隊まつり実行委員会 jocv.fes@gmail.com

開催中~5月31日 東ティモール写真作品展 「ninia」 香川

やまだめぐみ 山田芽実さん(東ティモール・写真・2013年度3次隊)が活動中に撮った、現地の美しい風景や、生き生きとした人々の表情の写真、約30点を展示。

- いつ? 2月26日(火)~5月31日(金) 10:00~17:00
- どこ? JICA四国(香川県)
- その他 休館日:土・日・祝

4月20日 青年海外協力隊の日を祝う会 東京

1965年4月20日に発足した青年海外協力隊事業。この日を「青年海外協力隊の日」として、青年海外協力協会(JOCA)が「協力隊の日を祝う会」を実施します。

- いつ? 4月20日(土) 12:30
- どこ? JICA広尾センター跡地(東京都)
- 連絡先 青年海外協力協会 komagane-hq@joca.or.jp

連絡先の記載がないものは、開催場所の国内拠点のウェブサイトをご覧ください。 <https://www.jica.go.jp/about/structure/domestic/index.html>

帰国後の進路を考える 帰国後研修、帰国報告・交流会の開催

2月16~19日に東京・新宿区のJICA市ヶ谷ビルで帰国後研修を開催し、108人の帰国したJICA海外協力隊が参加しました。この研修は、隊員経験を帰国後どのように生かすかをじっくり考える内容になっています。

また、帰国後研修の後に行われる帰国報告・交流会には、隊員の活用に関心を持っている自治体や企業などの関係者が参加し、自治体向けの会に21団体、企業向けの会に72団体が参加しました。この交流会をきっかけに参加自治体・企業の研究を始め、就職に至ったケースも少なくありません。本研修・交流会について、各隊員には帰国直前に在外事務所を通じて案内していますが、進路開拓中の帰国隊員も参加可能です。詳細については、下記メールアドレスにお問い合わせください。



交流会の様子

▶JICA青年海外協力隊事務局 人材育成課 jvtpc-sinrosien5@jica.go.jp

次回の帰国後研修、帰国報告会・交流会の予定

帰国後研修	日程	場所
職場復帰コース	5月18日、19日	JICA市ヶ谷ビル
進路開拓コース	5月18~21日	JICA市ヶ谷ビル
帰国報告会・交流会	日程	場所
自治体・団体向け	5月21日	JICA市ヶ谷ビル
企業向け	5月22日	JICA市ヶ谷ビル

派遣者数と帰国者数

2018年度4次隊の派遣者数、2016年度4次隊の帰国者数はそれぞれ次の通りです。

2018年度4次隊派遣者数	
青年海外協力隊	139人(40カ国)
シニア海外ボランティア	19人(10カ国)
2016年度4次隊帰国者数(2019年3、4月帰国/予定)	
青年海外協力隊	107人(40カ国)
シニア海外ボランティア	35人(18カ国)

JICA青年海外協力隊事務局 技術顧問の退任

2019年3月末に、2人のJICA青年海外協力隊事務局技術顧問が退任しました。

氏名	担当分野
荒木拓一	小学校教育、教育行政・学校運営
伊藤静夫	体育

BSフジで俳優の齋藤工さんが JICA海外協力隊の活動を紹介



番組名:「いつか世界を変える力になる」 放送日:3月17日 放送局:BSフジ
写真は、齋藤さんに帰国後の活動を語る若尾健太郎さん(クアメラ・村落開発普及員・2004年度3次隊)

俳優の齋藤工さんが活動中の隊員のもとを訪れ、彼らの「今」を追う番組「いつか世界を変える力になる」。この度、第三部が3月17日にBSフジで放送されました。

—昨年はマダガスカル、昨年はパラグアイを訪れた齋藤さん。壁にぶつかりながら、現地の人々とともに生活し、活動を行う隊員を身近に見ている齋藤さんが次に向かった先は……。まだご覧になっていない方、もう一度見たい方は、YouTube/JICA青年海外協力隊事務局公式チャンネルへ!

- ▶「2019 いつか世界を変える力になる 第3部」 <https://youtu.be/18sDNWPOVQw>
第一部・第二部は以下サイトからご覧いただけます。
- ▶「第1部」(マダガスカル、他) <https://www.youtube.com/watch?v=7Z9cyQnt10U>
- ▶「第2部」(パラグアイ、他) <https://www.youtube.com/watch?v=ll96xlelfms>

みなさんのフォローお待ちしております! JICA青年海外協力隊事務局公式Twitter

青年海外協力隊事務局の公式Twitterはもうフォロー済みですね!

公式Twitterでは、JICA海外協力隊の応募や選考、活動、帰国後のことだけではなく、マメ知識やほっこりする話題もやわらかめにつぶやいています。人気シリーズ「#スタッフの任国愛」では、全国の元隊員のスタッフが派遣国で出会った珍しい動物や料理、絶景などを紹介中! 要チェックです!

▶JICA青年海外協力隊事務局 公式Twitterアカウント <https://twitter.com/jocvjimukyoku>



つぶやき

お題 ▶ 日本食



イラスト=牧野良幸



今月の1枚

私のソウルフード、牛丼

「牛丼の並、つゆだくをお願いします」。カウンターでの、私の決まり文句である。たった数百円でお腹一杯になれる至福の時。キムチ、チーズなどのトッピングを添えるだけで、味も多様に変化する。でも、ここではあの味には出会えない。肉は高価で買いたくても、なかなか手が出せず。嗚呼、帰国したら一番最初に食べたいな。私のソウルフード、牛丼。

ペンネーム：厄瓜多のドンパバさん（男性） 協力隊員（中南米・コミュニティ開発・2018年度派遣）

★ ソイソース

日本に住んでいれば身近に買うことができる醤油。ときどき食べたくなる日本の味。炒め物から煮物まで和食をつくるのに欠かせない調味料。あーなんて万能なんだろうと、いまさらながら気づく醤油のポテンシャル。寿司くいてェー！

ペンネーム：バードオブパラダイスさん（男性）
協力隊員（大洋州・小学校教育・2018年度派遣）

★★ 麺が恋しい

派遣国ではうどんや蕎麦、ラーメンなどを食べる機会がほぼない。寒い季節は出汁のきいた温かいうどんや蕎麦がとても恋しい。たまたま先輩隊員から蕎麦をいただき年越し蕎麦をつくってみたものの、スープの味（味噌ベースにしてみた）が濃くなってしまった。今年は濃い1年になる予感。

ペンネーム：なんちゃって蕎麦職人の娘さん（女性）
協力隊員（中東・助産師・2018年度派遣）

★★★ 切磋琢磨

同期隊員から「ラーメンつくった」と写真が送られてくるので自然と励みになり、負けじと牛すじ煮込やウスターソースをつくったりする。私が完成品の写真を送ると、今度は天津飯が送られ……。それぞれ料理の職種ではないですが、日本食が食べられない任地だと必然的に料理力が上がります。きっと語学力よりも。

ペンネーム：ちくやまんさん（女性）
協力隊員（アジア・青少年活動・2018年度派遣）

募集中のお題

「初耳」「パーティ」「最新技術」

投稿は『クロスロード』編集室まで
(P35をご覧ください)

あなたのつぶやきが
イラストになるかも!?

就職・進学を始め各種情報の提供など帰国隊員の進路決定までをサポート



JICA進路相談カウンセラー／ 青年海外協力隊相談役の紹介



今月の相談 (就活編)

よくある相談に進路相談カウンセラー／
青年海外協力隊相談役がお答えします。

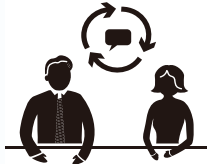
Q. 語学力を生かせる仕事に 就きたいです。

派遣国で身につけた語学を生かせる仕事
がしたいのですが、どんな仕事を選ぶのがよ
いでしょうか。

A. 語学はツールと考えましょう。

通訳や翻訳の仕事は、まさに語学を生か
すことになるでしょうが、それ以外の仕事で
は、語学は所詮ツールでしかないと考えた方
がよいでしょう。

「苦勞して身につけた語学を活用したい」「使
う機会がなければ話せなくなってしまふ」と
いう気持ちは理解できますが、語学ありきで
仕事を検討するのは、要注意です。仕事で重
要なのは、決して語学のスキルではなく、事
務職なら経理や文
書作成能力、営業職
なら折衝力や情報
収集力の方が重要
なスキルでしょう。



進路相談カウンセラー／青年海外協力隊相談役
に、進路の悩みや就活での疑問など、いつでもご相
談ください。



いとう あ き
伊藤亜紀さん(進路相談カウンセラー)
担当地域：東京・埼玉・千葉・群馬・茨城・栃木
✉ Ito-Aki.3@jica.go.jp

●経歴：青年海外協力隊(チ
ュニア)として活動後、
JICAやNGO関連などの国
際協力分野の職務を経て、
PARTNERキャリア相談員
としてカウンセラー業務に就
く。2012年より現職。

帰国後の進路はしっかり決めている方がいる一方で、全く考
えていない方、早く決めなきゃと焦る方もいるでしょう。特に焦
っている方はちょっと考えてみてください。どうして早く決めたい
のでしょうか？ 進路が決まればもちろん、安心でしょうが、重要
なのは自分にとっての最良の選択となるかどうかですね。募集
期や締め切りのタイミングも気になるにせよ、やりたいことが定
まらないときには迷うばかりとなりかねません。任地では進路
に関する情報収集や準備が困難な方、今は活動に注力したいと
いう方も多数でしょう。帰国後に集中して動いた結果、よい縁
につながったという方々は大勢います。活動と同じく、就職や進
路決定のペースも人それぞれですね。

さとう み き こ
佐藤美喜子さん(青年海外協力隊相談役)
担当地域：宮城・山形・福島
✉ jicathic-cs1@jica.go.jp



「書類は、読み手がいることを意識して書きましょう」、「相手は、
この書類でしかあなたを知ることができません。書いていない
ことは、ないのと同じですよ」。書類添削が私がよく言うフレー
ズです。やる気に溢れ、前向きで、唯一無二の経験をしてきたみ
なさんですが、今後の人生に生かしていくには、それを伝えたり
振り返ったりすることも大切です。他人に話すことは、想いを整
理し、自分の魅力を探るための第一歩です。
JICA 進路相談カウンセラー／青年海外協力隊相談役は、鏡で
あり、伴走者。書類添削・面接対策・情報提供はもちろんのこと、
何も決まっていない方も、どうぞ話しにいらしてください。

●経歴：民間企業のシステ
ムエンジニアとして勤務の傍
ら、2006年より、産業カウ
ンセラーとして、メンタルヘル
ス相談・キャリア支援などに従
事。13年4月より現職。

クロスロード

平成31年4月号 [第55巻第3号 通巻645号]
発行日 平成31年4月1日

編集・発行：
独立行政法人国際協力機構青年海外協力隊事務局
〒102-8012 東京都千代田区二番町5-25
二番町センタービル

『クロスロード』ウェブ版は
以下のアドレスからアクセスできます。
[https://www.jica.go.jp/
volunteer/outline/publication/
pamphlet/crossroad/index.html](https://www.jica.go.jp/volunteer/outline/publication/pamphlet/crossroad/index.html)



ご意見・ご感想をお聞かせください。 アイデアも大募集!

今号をお読みになり、どのようにお感じになり
ましたか。ご感想・ご意見をお寄せください。
また、今後取り上げてほしい企画や特集のテ
ーマ、ご紹介いただけるアイデアがございまし
たら、下記のメールアドレスにお送りください。

以下のようなアイデア・ 投稿を募集中です

- 派遣国での活動・生活での「失敗」談、お聞
かせください。
- 活動や日常でちょっと役立つ、そんな技をお
伝えください。もしくはこんな技を紹介してほ
しいというご要望もお待ちしています。
- P34の下に記載されている「お題」で派遣国
での活動・生活のことをつづやいてみませんか。
- 帰国後の就活・進路の悩みをお寄せください。



一般社団法人協力隊を育てる会『クロスロード』編集室
crossroads@sojocv.or.jp





CROSS YELL!!

—先輩隊員からの置き土産—



日本とのギャップに戸惑うところから活動が始まりました。

まつしま ゆか
文=松嶋佑佳さん

- ▶モロッコ
- ▶障害児・者支援
- ▶2017年度1次隊

PROFILE

1989年生まれ、山口県出身。公立中学校の英語科教員を経て、2017年7月、協力隊員としてモロッコに赴任(現職教員特別参加制度)。19年3月に帰国予定。

活動概要

タンジェ市内の公立小学校に併設されている特別支援学級で、主に以下の活動に従事。

- 1年目：難聴児特別支援学級における図工・体育・音楽の授業の実施
- 2年目：知的障害児特別支援学級の立ち上げのフォロー、およびその教員を対象にした研修会の開催

私は協力隊に参加するまで、日本の中学校で教員をしていました。平日は息つく暇もなく一日が終わり、土日も終日、部活動の指導。

そんな日々を送ってきた私に、着任した途端、試練が。活動先の学校が夏期休暇中だったため、活動がすぐには始められなかったのです。仕事に追われることで自分の存在意義を感じていた私にとって、このギャップは辛かった！派遣前訓練を共にした同期隊員を思い浮かべ、「彼らなら、こんな状況でもエネルギーに活動を見つけ出していくんだろうな」と勝手に想像しては、凹んでいました。

学校が始まると、「言語の壁」という新たな悩みも大きくなっていきました。任地の人々は普段、アラビア語で話をするのですが、私が派遣前訓練で学んだのは、もうひとつの公用語であるフランス語。アラビア語の壁により、任地の人からご飯に誘われても断ってしまうばかりで、どうしてもひとりで食べる事が多くなっていきます。すると、心はどんどんマイナス思考に。

そんな出口の見えない日々から抜け出すことができたのは、モロッコ在住の日本人や海外からの旅行者など、私と同じように「文化のギャップ」を経験しているであろう方々を相手に、悩みを包み隠さず打ち明けるよう心がけたことがきっかけでした。彼らと話をする中で、私は生真面目すぎるあまり、「任地に早く馴染み、好きにならなければ」という考えが足かせとなっていたのだ

と気づくことができたのでした。

そうして自分と向き合い、ようやく気持ちが安定すると、活動のペースがつかめるように。自分の「心」に邪魔され、実践をためらってしまっていた「講習会」や「公開授業」を実現するなど、無理のない範囲で活動が少しずつ広がっていきました。

＼YELL!!／

思い通りにいかないときは「ま、いっか」と唱えてみる！

「言いたいことが伝わらない」「活動がうまくいかない」など、活動や生活での悩みは尽きないと思います。自分の思い通りにいかないときは、まずは肩の力を抜いてみる。そうすると、新たな道が見つかることが多かったと思います。



会々と元気が出る活動先の教員(右端)と難聴児特別支援学級の子どもたち。前任者(前列左端)が訪問してくれた日の一枚



今月号の表紙
ウガンダ



くろやもとよ
文・撮影=黒谷素代さん
(ウガンダ・小学校教育・2017年度1次隊)

小学校で情操教育の促進を目標に活動しています。まずは低学年を対象に、課外活動として情操教育を開始。写真は、「Yumi Collection」をテーマにした図工の課外授業での一枚です。泥水で顔を塗り、折り紙をちぎってたてがみを表現。ひとつひとつ違う、とても温かみのある作品に仕上がりました。やがてある先生に「図工は子どもを幸せにする。アイデアを教えてほしい」と言われ、以来、通常授業としての図工に共に取り組んできました。今後も、子どもの豊かな成長のために続けてほしいと願っています。